

財団法人 愛知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第1集

石堂野遺跡

1987

財団法人 愛知県埋蔵文化財センター

序

本書は『財団法人愛知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第1集』として刊行する石堂野遺跡の発掘調査報告書であります。

愛知県宝飯郡御津町豊沢に所在する石^{いし}堂^{どう}野遺跡は、昭和59年から昭和60年にわたり、県立御津高校の新設工事に先だって実施された分布・試掘調査によって発見され、愛知県教育委員会の委託により、本埋蔵文化財センターが昭和60年6月から8月にかけてこの調査を行いました。調査の結果、古墳時代から近世にかけての竪穴住居、掘立柱建物、溝などが検出され、現在不明な点の多い県内の丘陵部における当時の人々の生活に関し、貴重な資料が得られたと考えております。

発掘調査にあたり、愛知県教育委員会の御指導並びに愛知県教育委員会学校建設室、御津町教育委員会をはじめとする諸機関及び関係者の皆様に多大な御協力をいただきましたことに対し、深く感謝の意を表する次第であります。

この報告書が地域史研究や、埋蔵文化財に対する御理解の一助ともなれば幸いと存じます。

昭和62年3月

財団法人愛知県埋蔵文化財センター

理事長 小金 潔

例 言

1. 本書は愛知県宝飯郡御津町豊沢に所在する石堂野遺跡の発掘調査報告書である。
2. この発掘調査は昭和61年度県立高等学校の新設工事に先行して、愛知県教育委員会を通して委託を受けた財団法人愛知県埋蔵文化財センターが実施した。
3. 調査期間は昭和60年6月から8月までである。
4. 発掘調査は、遠藤才文・宮腰健司が担当した。
5. 調査にあたっては、大林正巳（御津町教委教育指導員）・中川真文（愛知県教委文化財課）の両氏の御指導・御助言をいただいた。

また、御津町教育委員会の各位、並びに下記した発掘協力者の各氏に多大な御協力を得た。

青木昌代 足立初枝 市川文子 大須賀八重子 太田きぬ江 小野可南子 柏原久子
上原末男 柴田いつ 白井一則 白井千代子 鈴木静子 鈴木すえの 中村豊子 尾藤
次男 堀保衛 村上典子 山口千恵子 渡辺みや子（敬称略）

6. 発掘調査及び資料整理には、鈴木路治（愛知大学）・広瀬健一（同）の両氏に御協力いただいた。
7. 本書の執筆は、第Ⅰ章－1を中川真文が、その他を宮腰健司が行った。
8. 調査記録・出土遺物は、財団法人愛知県埋蔵文化財センターに保管する。
9. 報告書をまとめるにあたり、宮石宗弘（瀬戸市歴史民俗資料館）・藤澤良祐（同）・中野泰裕（愛知県陶磁資料館）・川合 剛（名古屋市博物館）・赤羽一郎（愛知県教委文化財課）の方々に御教示・御協力を賜った。記して感謝したい。（順不同・敬称略）

目 次

第Ⅰ章 調査の経過	1
1. 調査にいたる経過	1
2. 調査の経過	2
第Ⅱ章 位置と環境	3
第Ⅲ章 遺 構	6
1. 概 要	6
2. I期の遺構	8
3. II期の遺構	9
4. III期の遺構	16
5. IV期の遺構	18
第Ⅳ章 遺 物	19
1. I期の遺物	19
2. II期の遺物	19
3. III期の遺物	20
4. IV期の遺物	20
5. 石 器	20
第Ⅴ章 ま と め	21
第Ⅵ章 高坂遺跡	25

図 版 目 次

遺物実測図

1. 石堂野遺跡出土遺物（Ⅰ期）
2. 石堂野遺跡出土遺物（Ⅱ期）
3. 石堂野遺跡出土遺物（Ⅱ期）
4. 石堂野遺跡出土遺物（Ⅲ期・Ⅳ期）
5. 石堂野遺跡出土の石器
6. 高坂遺跡出土遺物

遺構写真

7. 調査前・調査区遠景・調査風景
8. 石堂野遺跡全景
9. 発掘区西側

10. 発掘区中央部・SB02

11. SB15・16セクション・発掘区東側

12. SB02 周溝内土器出土状態

SK124 土器出土状態

遺物写真

13. 石堂野遺跡出土の石器

Ⅰ期の遺物

14. Ⅱ期の遺物

15. Ⅲ期の遺物

16. 高坂遺跡出土遺物

挿 図 目 次

- 第1図 試掘調査トレンチ位置図…………… 1
- 第2図 石堂野遺跡位置図…………… 3
- 第3図 石堂野遺跡発掘区位置図…………… 4
- 第4図 石堂野遺跡と周囲の遺跡…………… 5
- 第5図 石堂野遺跡遺構図…………… 7
- 第6図 SB02 …………… 8
- 第7図 SB18 …………… 9
- 第8図 SX01 …………… 9
- 第9図 SB01 ……………10
- 第10図 SB05 ……………10
- 第11図 SB03 ……………11
- 第12図 SB06 ……………11
- 第13図 SB07・08 ……………12

- 第14図 SB09 ……………12
- 第15図 SB10 ……………13
- 第16図 SB14 ……………13
- 第17図 SB15・16 ……………14
- 第18図 SB21 ……………15
- 第19図 SB22 ……………15
- 第20図 SD06 ……………16
- 第21図 SX06 ……………17
- 第22図 SB23 ……………18
- 第23図 遺構変遷想定図……………22
- 第24図 SX06 復元推定図 ……………24
- 第25図 石堂野遺跡全体図……………26

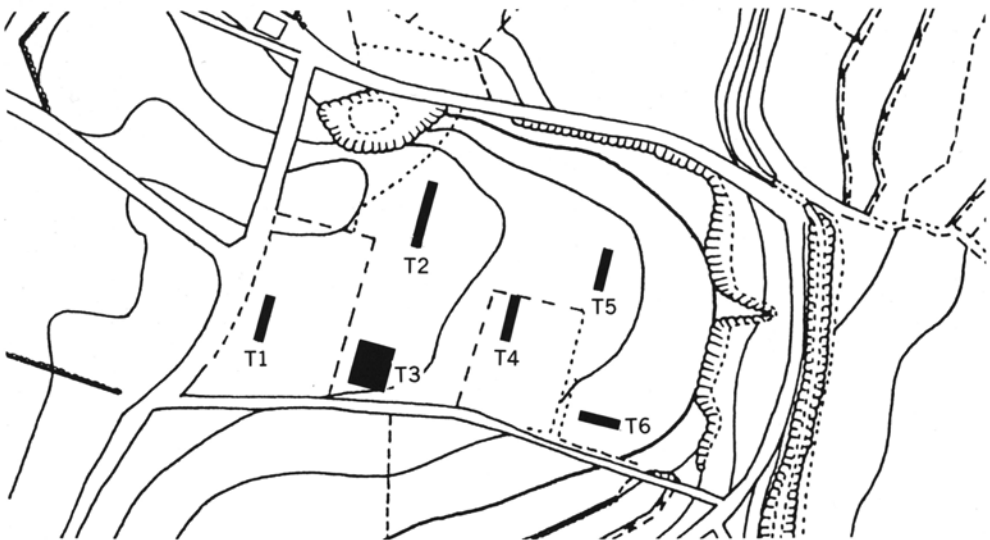
第Ⅰ章 調査の経過

1. 調査にいたる経過

愛知県教育委員会は昭和61年度県立高等学校の新設を宝飯郡御津町を始め5地区に計画した。建設予定地内の埋蔵文化財包蔵地の有無について、愛知県遺跡分布地図と照合したが、5地区ともに埋蔵文化財包蔵地の分布は認められなかった。しかし、御津地区については、隣接地に茂松（穴観音）古墳や銅鐸出土地として知られる広石遺跡が位置し、建設予定地内に遺跡の立地に好条件である舌状に延びる丘陵が存在すること、さらに、周辺地域で土器などが採集されているという情報などから、現地踏査を実施することとした。

昭和60年2月25日、県教委文化財課は御津町教育委員会とともに現地踏査を実施した。建設予定地は北側が標高40～60mの山林、中央部が谷あいの畑や水田、南部がミカン畑の丘陵部からなり、現地踏査の結果、丘陵部の東西60m、南北40mの範囲より奈良時代から近世にかけての須恵器・土師器・山茶碗・陶磁器など約40片を採集することができた。この現地踏査結果から、さらに、遺物の散布範囲内について遺物包含層や遺構の存在確認のための試掘調査が必要となり、その旨を県教委学校建設室に回答した。

その後、試掘調査について県教委、御津町及び町教委で検討した結果、御津地区新設高校用地内埋蔵文化財調査会を設置し、県教委文化財課中川真文を調査担当者、町教委社会教育指導員大林正巳・愛知大学生鈴木路治・広瀬健一を調査員とし、昭和60年4月から5



第1図 試掘調査トレンチ位置図 1:1000

月にかけて実施することにした。試掘調査対象地域の丘陵は果樹園として利用され、移植による攪乱部分があったために試掘地点は制約をうけ、1×5mのトレンチを5カ所、1×3mのトレンチを1カ所設定し、4月24日から第2・3・6・1・4・5トレンチの順に実施した。調査は第3および第6トレンチから遺構を検出したが、第1・2・4・5トレンチでは遺構は認められず、土器の細片が数点出土したにとどまった。第3トレンチでは地表面下40cmで竪穴住居跡・土壇1・ピット13・溝1を検出した。竪穴住居跡は幅20cmの周溝を有し、中央の土壇から土師器の甕の一括、埋土より須恵器の盤などが出土した。出土遺物から8～9世紀の時期の住居跡と推定される。また、第6トレンチからは竪穴住居跡の一部と推定される幅20cmの周溝とピット5を検出し、土師器の細片が数点出土した。以上のことから、丘陵の南部を中心に集落跡の存在が確実となり、本遺跡の名称を土地の小字名から石堂野遺跡とした。

遺跡が存在することから、遺跡の取扱いについて学校建設室と協議を行った。その結果、石堂野遺跡の位置する丘陵部分を削平しなければ運動場の造成が困難であるとの地形上の理由から、発掘調査による記録保存とし、発掘調査は昭和60年7月から財団法人愛知県埋蔵文化財センターが中心となって実施することに決定した。

2. 調査の経過

調査区の設定は、建設省告示に定められた平面直角座標第Ⅷ系（原点 北緯36° 東緯137°10'）に準拠し、1km方眼、100m方眼、5m方眼のそれぞれ大中小のグリッドによって地区割した。発掘調査は第1表のとおり進行したが、梅雨時であったため降雨による作業の中断が多々生じた。また、調査最終日には作業員・地元住民に対する現地説明会を行った。

年 月 作業内容	6			7			8
	1		30	1		31	10
伐 採							
表土除去							
遺構検出							
遺構掘削							
写真・実測							

第1表 調査日程

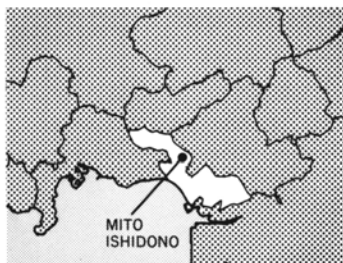
第II章 位置と環境

位置と環境

石堂野遺跡は、国鉄東海道本線愛知御津駅北西約2kmの、愛知県宝飯郡御津町豊沢に位置する。遺跡は、御津町から蒲郡市にかけて東西方向にわずかに弧状をなして走る断層谷の北側の、北西から南東に舌状にのびる丘陵の平坦地に立地する。遺跡の標高は海拔約41mを測り、北及び東側は谷地形をなす。谷底面との比高は約10mである。南側はゆるやかに低くなりつつ豊沢地区の集落につながっていく。また、南東側に大きく平野部が広がっていき、三河湾や小坂井町・豊橋市を眼前に眺めることができる。

歴史的環境

石堂野遺跡付近の主な遺跡についてみると、弥生時代では、南東2.5kmに弥生時代中期後半の長床遺跡、東方500mの山麓に扁平鈕式の流水文銅鐸を出土した広石銅鐸出土地、東方1.8kmの台地に弥生時代後期の国府高校遺跡、その東方200mには同じく弥生時代後期の坊入遺跡などがある。古墳時代では、北東1kmの丘陵に古墳時代中期の大入山1号墳、音羽川を挟んだ対岸1kmの台地に同じく古墳時代中期の船山第1号墳(前方後円墳、全長96m)、石堂野遺



第2図 石堂野遺跡位置図 1:25000 (東は高坂遺跡)

跡南東1kmに古墳時代後期の船山古墳（前方後円墳 全長37m）がある。さらに遺跡の北東140mの小丘陵の頂部に古墳時代後期の穴観音古墳（円墳 全長16m）がある。奈良時代になると、この付近一帯は三河の中心的な地域となり、三河国衙推定地や三河国分寺跡・三河国分尼寺跡などが築かれていく。さらに同時期の寺院としては、御津町に所在する弥勒寺跡、小坂井町に所在する医王寺跡、豊川市に所在する山ノ入遺跡が知られている。また国衙推定地の北方1.3kmには西明寺西瓦窯跡がある。国衙推定地の南側より御津町一帯にかけては、条里遺構が良好に残存している地域として著名である。また、中世末から戦国時代に至ると、この地域一帯が遠江の今川氏と三河の松平氏とが対峙する地帯となり、領主が交替することが頻繁となり、それに伴い特に東海道などの街道沿いにおいては城や砦が多く築かれていく。

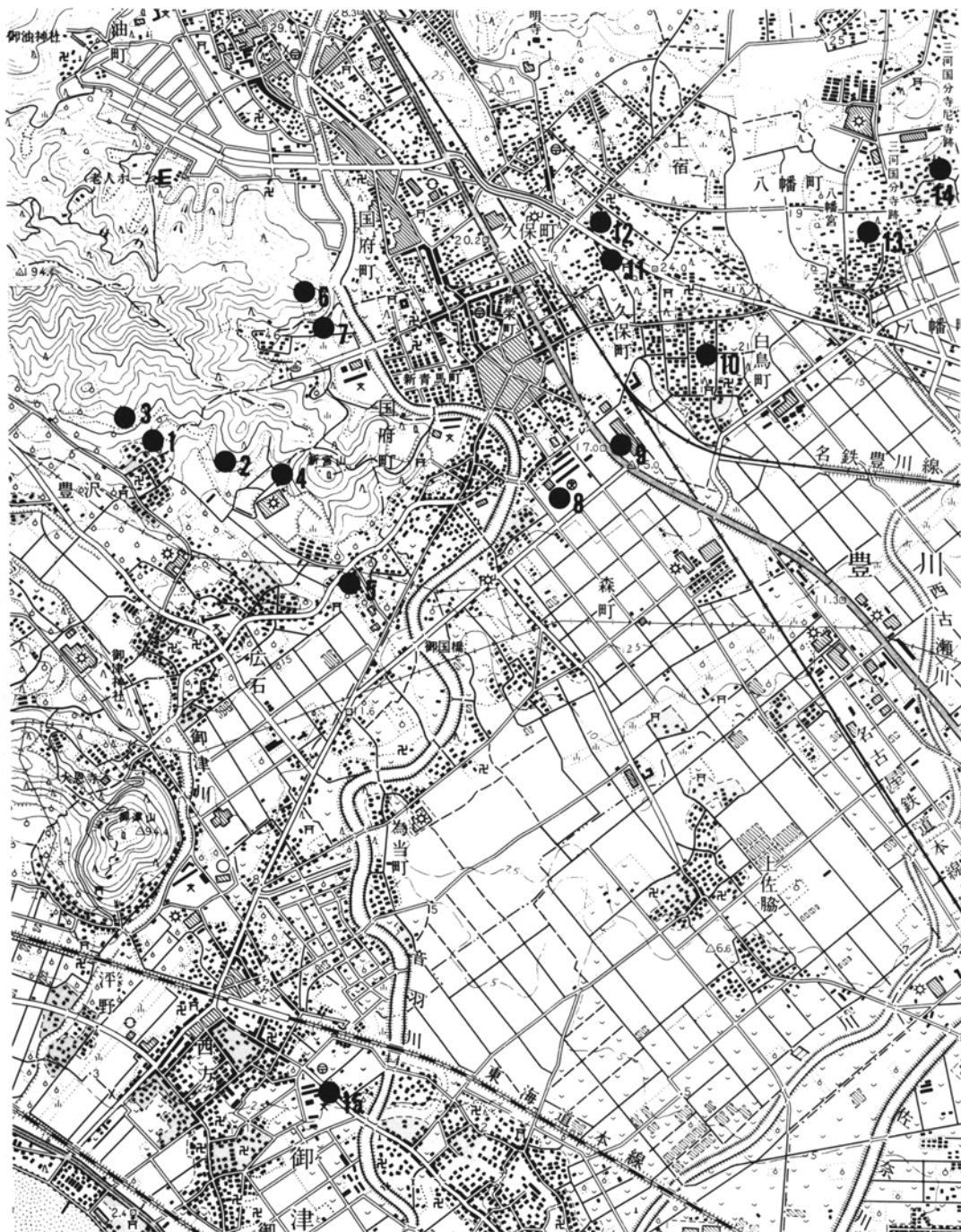
歌川學『三河遠江の史的研究』1984

斎藤嘉彦・片山洋『山ノ入遺跡』1985

豊川市史編集委員会『豊川市史』1973



第3図 石堂野遺跡発掘区位置図 1:1000



1. 石堂野遺跡 2. 高坂遺跡 3. 穴観音古墳 4. 広石銅鐸出土地
5. 船山塚古墳 6. 大入山第1号墳 7. 山ノ入遺跡 8. 国府高等学校遺跡
9. 坊入遺跡 10. 三河国府推定地 11. 久保古墳 12. 船山第1号墳
13. 三河国分寺跡 14. 三河国分尼寺跡 15. 長床遺跡

第4図 石堂野遺跡と周囲の遺跡 1 : 25000

第Ⅲ章 遺 構

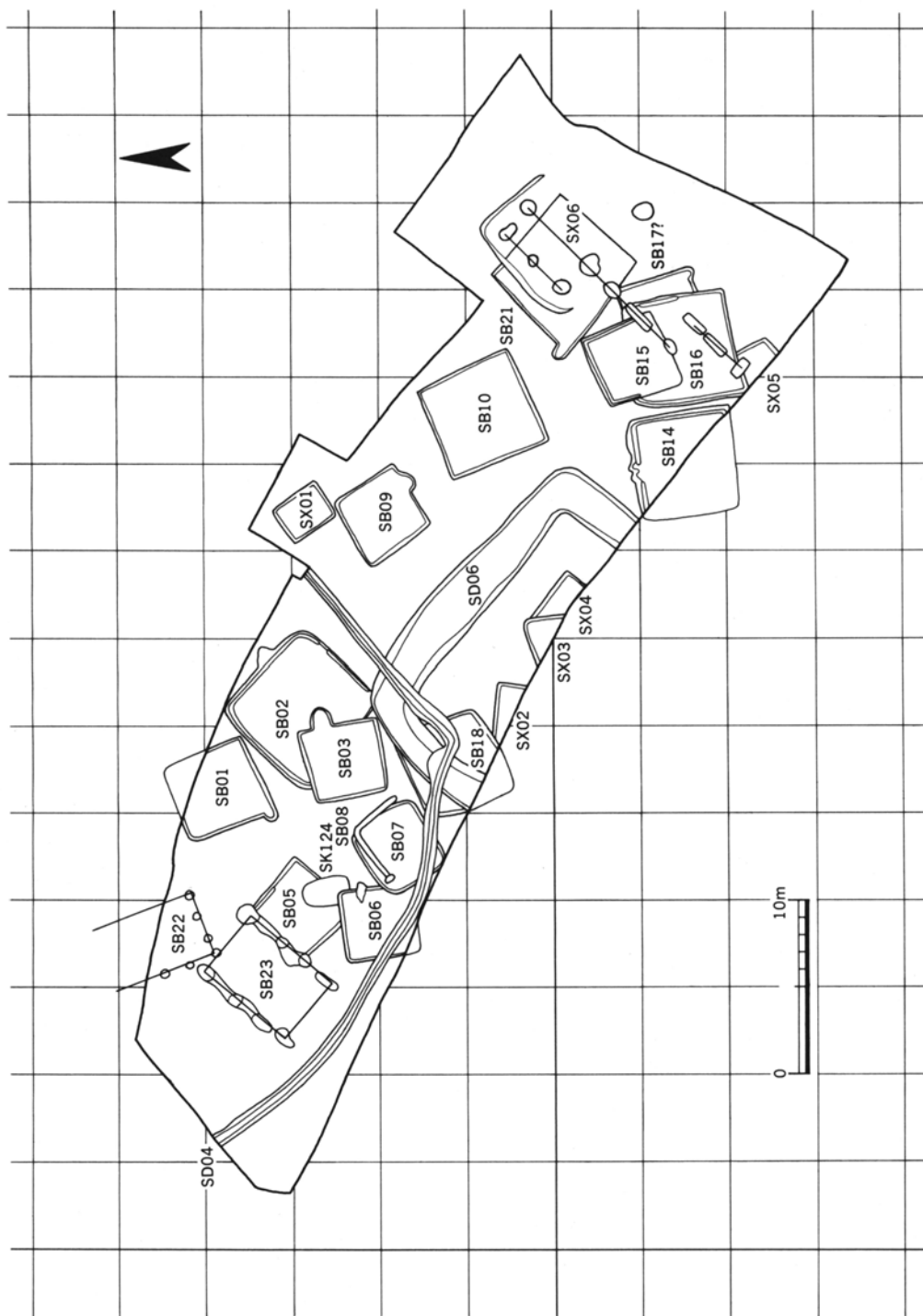
1. 概 要

今回の石堂野遺跡の調査においては、竪穴住居13軒、掘立柱建物2軒、竪穴状遺構1基、柵状遺構1～3列、溝2条、土壇1基が検出されている。

これらの遺構は、表土（腐殖土）を除去した後の、表土下20～40cmにある赤褐色砂質土面で捉えることができた。遺構の残存状況は、表土から地山面までが浅いこと、樹木類（ミカンや桑など）の根の伸長やその耕作による地面の掘削、山の斜辺近くにあるための山砂の移動などにより、けっして良好な状態ではなく、包含層もみられなかった。また、遺構の上部のほとんどが削平されてしまっていることが多く、竪穴住居の場合でも、埋土はわずか数センチというものが大部分であった。そのため、遺構内外を問わず、まとまった遺物の出土はSK124を除きみられず、一遺構に破片が数片から数十片という出土状況であった。

遺構はその出土遺物により、4期に分かれる。埋土からみると、Ⅰ・Ⅱ期—灰褐色砂質土及び暗灰褐色砂質土、Ⅲ期—暗赤褐色砂質土（砂質強い）、Ⅳ期—暗灰色砂質土という具合に分かれるが、あくまでも傾向として言えるだけであり、全ての遺構を埋土によって識別することはできなかった。

以降、この章ではⅠ～Ⅳ期の区分に従い、個別の遺構の説明をしていきたいと思う。

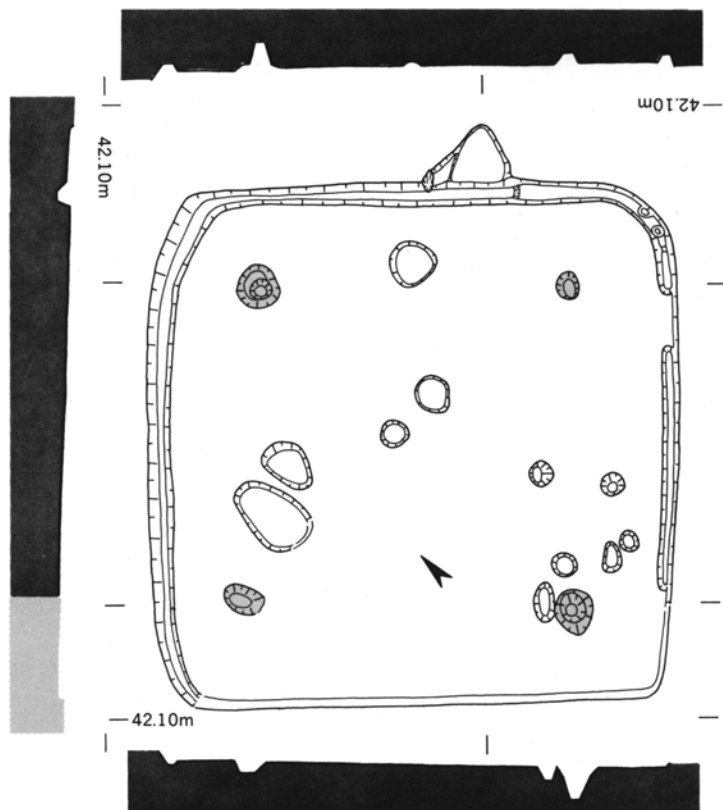


第5図 石堂野遺跡遺構図 1 : 200

2. I 期の遺構

SB02

- 規模
7.0×(6.9)m
- 掘肩比高
2～15cm
- 方位
N-46°-W
- 出土遺物
図版1-5～8

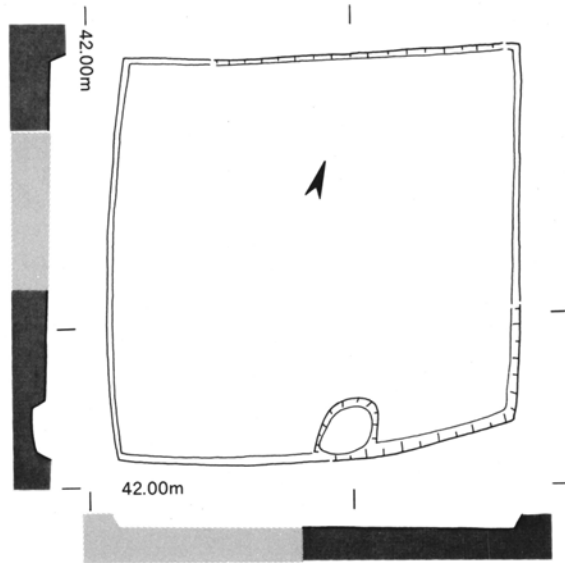


第6図 SB02 1:100

SB02 は一辺 7 m を測り、本遺跡中最大のものである。形態はほぼ正方形をなすと思われるが、南側がSB03により削平されており明瞭ではない。周溝は幅約30cm、深さ約8cmを測り東側において2ヶ所途切れている。南東側については、後世の削平を受け不明瞭であり、周溝が廻るとも考えられる。北東側のものは確実に切れており、出入口の可能性が考えられる。周溝内より、図版1-8の小型碗が転落した状態で出土している。北辺にある突出部については、底面に火を受けた状況がみられたが、周溝が廻っていることからみてカマドとは考えられず、建物に伴う何らかの施設か、住居以前のものと思われる。柱穴はアミカケのもの4つがそれとえられる。

SB18

- 規模
5.3×()m
- 掘肩比高
2～10cm
- 方位
N-22°-W
- 出土遺物
図版1-1



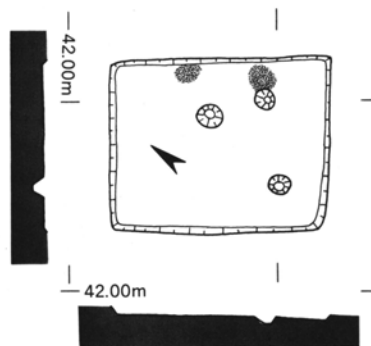
第7図 SB18 1:100

SB18 は中央の大部分が SD06 と重複しており、規模・周溝・柱穴とも不明瞭な部分が多い。床面上より、図版1-1の高杯の坏部が出土した。

3. II期の遺構

SX01

- 規模
2.9×2.3m
- 掘肩比高
2～8cm
- 方位
N-38°-W



第8図 SX01 1:100

SX01 は、小規模の竪穴状の掘りこみで、長方形を呈する。床面上において2カ所(アミカケ) 焼土面が検出された。柱穴らしきものは遺構内、遺構近辺とも検出されなかった。

SB01

○規模

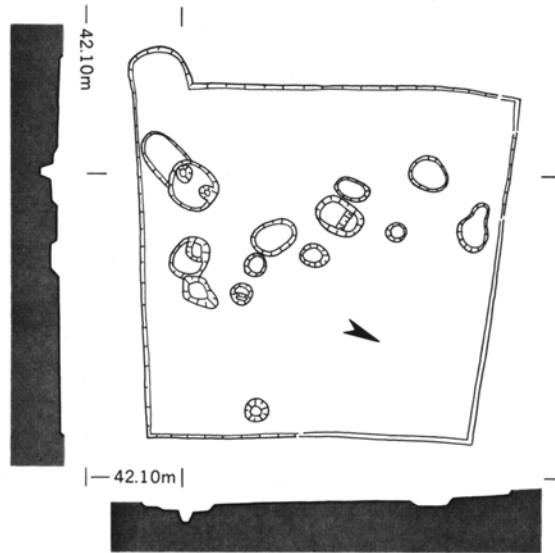
4.9×4.7m

○掘肩比高

1～4cm

○方位

N-28°-W



第9図 SB01 1:100

SB01 は、北隅部が調査区外にあるため全体が明らかにならなかったが、やや不定形であり、推定部分がもう少し外に張出す可能性がある。南西隅にある突出部に関しては、焼土はみられなかったが、埋土からみて住居に伴うものと思われる。柱穴に比定できるピットは検出されなかった。

SB05

○規模

4.2×()m

○掘肩比高

3～8cm

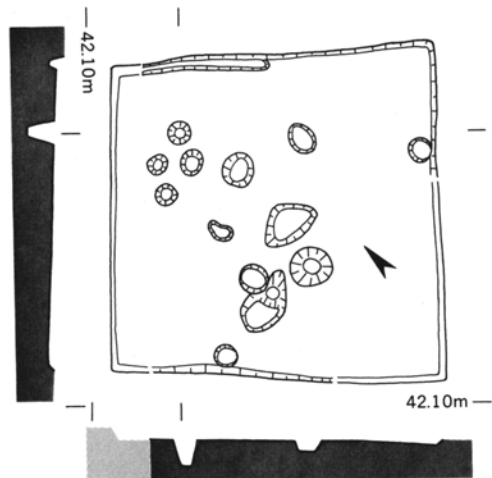
○方位

N-45°-W

○出土遺物

図版2-16・17

SB05 は、北辺・南辺が後世の削平を受け全体は不明である。東辺において部分的にはあるが、幅約20cm・深さ約15cmの周溝が検出された。



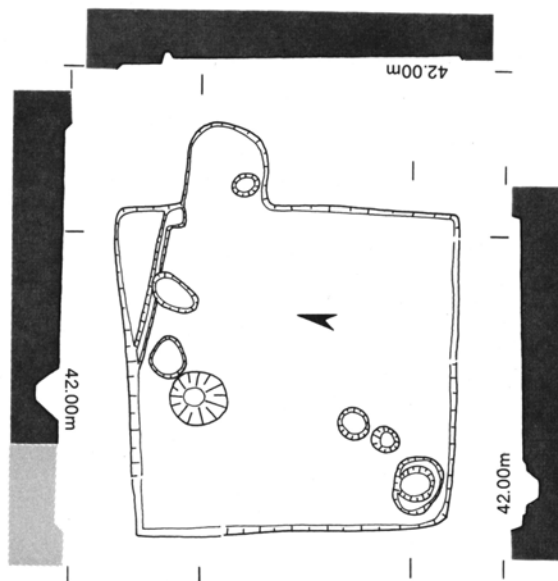
第10図 SB05 1:100

SB03

- 規模
4.3×4.3m
- 掘肩比高
5～10cm
- 方位
N-10°-W
- 出土遺物
図版3-23～26

SB03 の北東隅より，床面より約6cm高く三角形を呈する平坦な高まりとそれ

に沿った溝が検出されたが，別遺構との錯綜は確認できず，SB03 に伴うものと考えたい。東辺にある突出部より焼土面は検出されなかった。



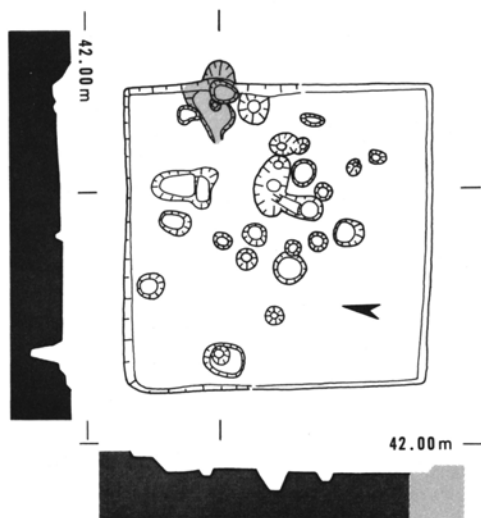
第11図 SB03 1:100

SB06

- 規模
4.0×()m
- 掘肩比高
4～10cm
- 方位
N-9.5°-W
- 出土遺物
図版3-27～29

SB06 は，南辺が後世の削平

のため全体の規模は不明である。東辺の上端にある斜めの掘りこみと下端の浅い不定形なピットには焼土面（アミカケ部分）がみられ，カマドになるものと思われる。



第12図 SB06 1:100

SB07・08

○規模

SB07 4.1×4.4m

○掘肩比高

SB07 3～8cm

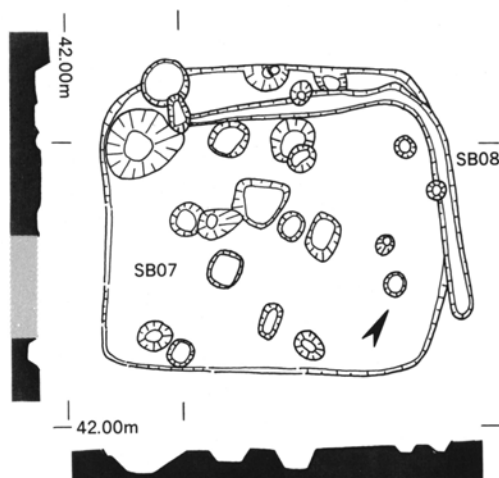
○方位

SB07 N-30°-W

SB08 N-40°-W

○出土遺物

図版3-34～37



第13図 SB07・08 1:100

SB08 は上部が後世の削平を受け掘肩はまったく残在せず、同溝のみが検出された。

SB07 は SB08 の周溝によって切られているが、全体の規模は確認することができる。

遺物は、全て床面より浮いた状態で出土しており、2軒の住居のどちらに属するのかは不明であった。

SB09

○規模

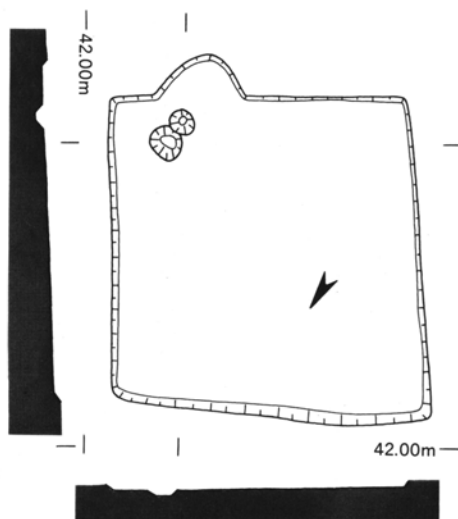
4.2×4.1m

○掘肩比高

1～5cm

○方位

N-36.5°-W

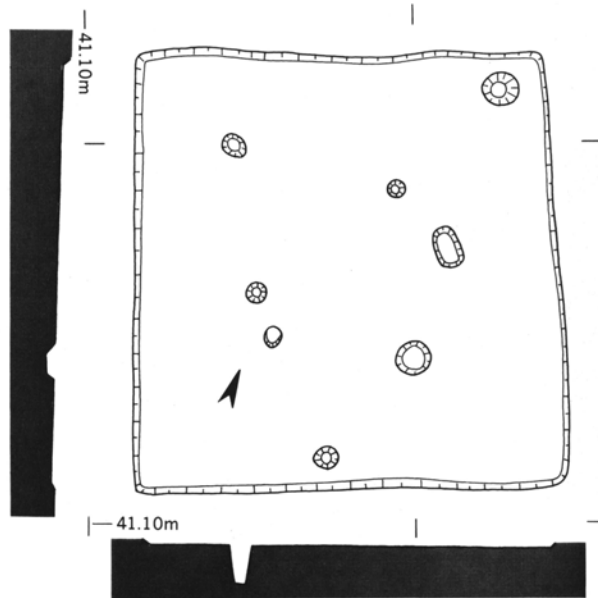


第14図 SB09 1:100

SB09 は、上部は後世に削平を受けており、掘肩はほとんど残在していない。東辺の突出部では焼土面はみられない。

SB10

- 規模
5.7×5.6m
- 掘肩比高
5～10cm
- 方位
N-24.5°-W
- 出土遺物
図版3-32

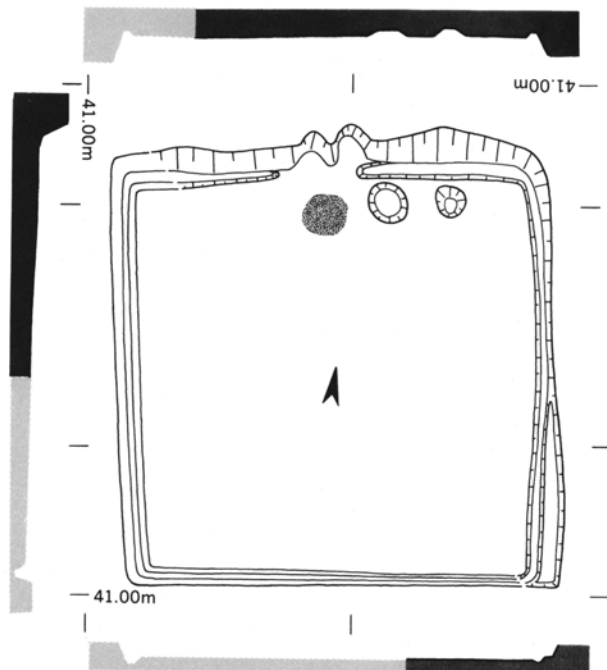


第15図 SB10 1:100

SB14

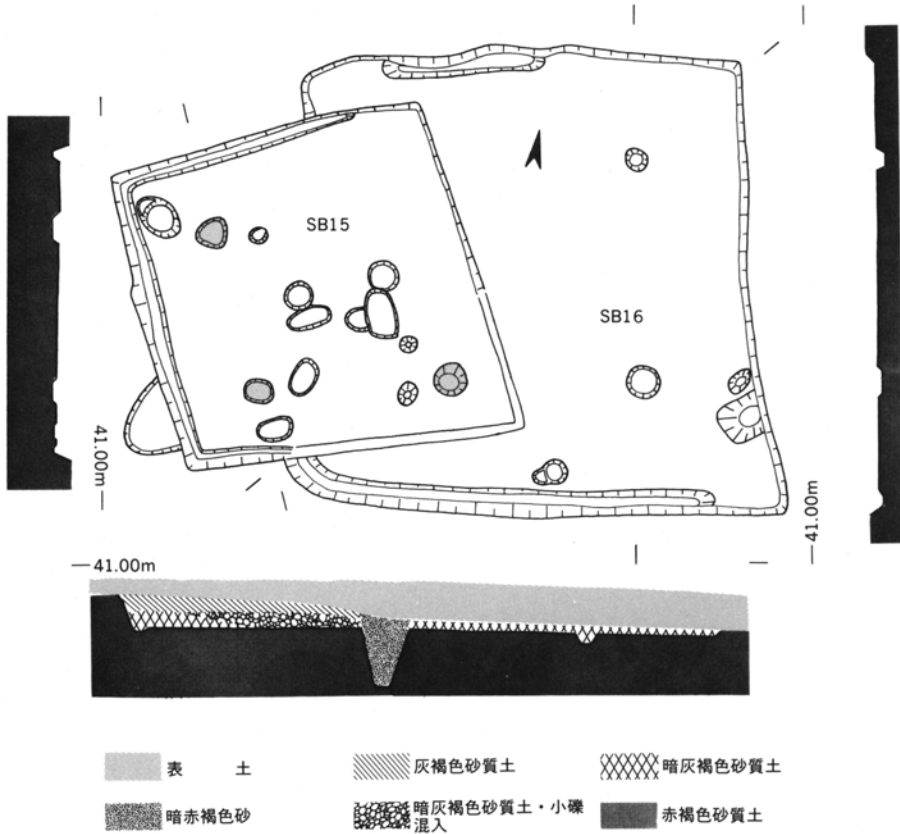
- 規模
5.8×()m
- 掘肩比高
10～35cm
- 方位
N-10°-W
- 出土遺物
図版3-9～13

北辺にある不定形のピットは、その内側に焼土面（アミカケ部分）があること、周溝が途切れていることからみて、カマドになるものと思われる。西側は調査区外になる。



第16図 SB14 1:100

SB15・16



第17図 SB15・16 1 : 100

○規模

SB15 4.3×4.2m

SB16 6.2×5.8m

○掘肩比高

SB15 10～25cm

SB16 3～35cm

○方位

SB15 N-26.5°-W

SB16 N-14°-W

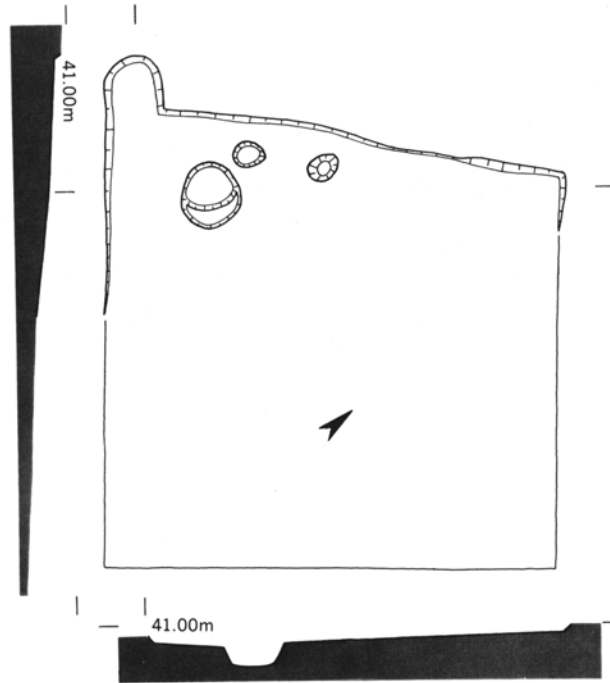
○出土遺物

SB16 図版 3-11

SB15→SB16の順で住居が築かれている。これらの住居が作られた場所は、遺跡の中でも斜面が急になり始めているところであり、東側にいくに従い、削平と上位からの土の堆積は急である。ちょうどSB15の東側にあたる部分にのみ小礫を混じえた堆積（暗灰褐色砂質土）がみられるが、これは、SB16の埋土の東側の低くなっている部分に土を張り、SB15の床面を水平にしているためかと考えられる。柱穴は、それぞれのアミカケのピットがあたる。焼土面は検出されなかった。

SB21

- 規模
6.4×()m
- 掘肩比高
10～15cm
- 方位
N-46.5°-W

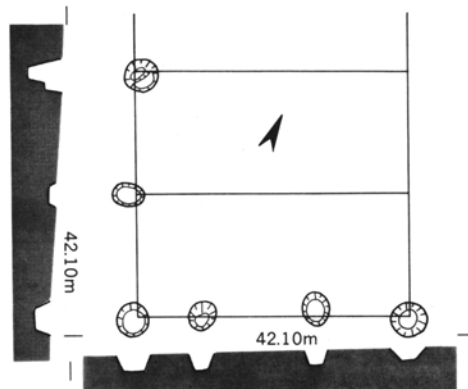


第18図 SB21 1 : 100

東側の大部分が SX06 によって削平されており、詳細は不明である。西側突出部より極僅かの焼土が検出された。

SB22

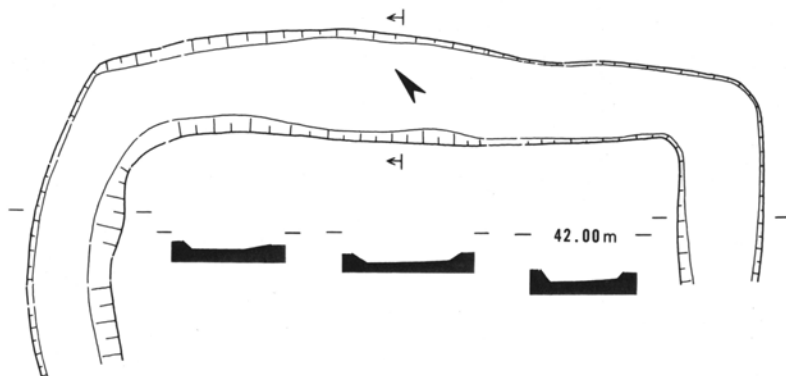
- 規模
桁行(2間)・3.2m
×
梁間 3間・3.6m
- 方位
N-21°-W



第19図 SB22 1 : 100

SB22 は桁行は発掘区外のため不明であるが、梁間が3間となる掘立柱建物である。柱穴はやや不揃いであるが、径30～50cm、深さ5～20cmの円形を呈する。

SD06



第20図 SD06 1 : 100

○規模

2.2×2.8m

○掘肩比高

5～30cm

○方位

N-50°-W

○出土遺物

図版3-30・31

SD06 は方形に廻る溝である。溝深が浅いため、埋土を分層するまでには至らず、異なるレベルより各時期・各種の遺物が出土したが、地山面に近く且つ最も新しい時期の遺物で時期を決定した。水が恒常的に流れていた痕跡や、長い時間放置されていて堆水していた状況もみられず、比較的短期間の間に埋没したものと思われる。SD06 は SB02・SB18 を切って作られる。

4. III期の遺構

SX06

○規模

A 2間・4.4m

B 4～5間・11.5m

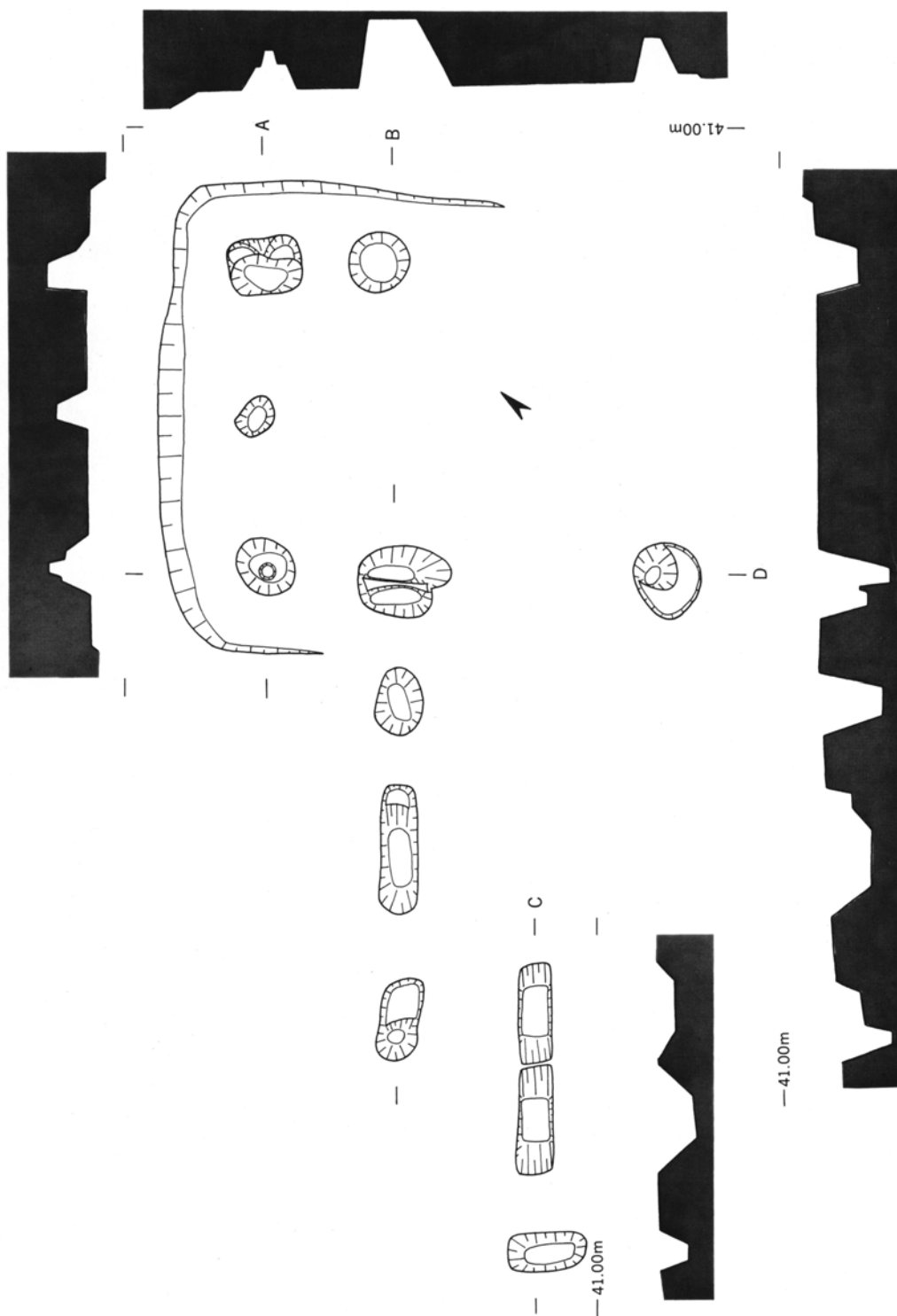
C 2間・3.5m

D 3～4間・5.7m

○方位

N-46°-W

SX06 は、北東から南西にかけて3条、それと直角に1条、同様の埋土をもつピット列と、それに沿う形で削平されている竪穴状の落ち込みからなる。ピット列は他の時期とはまったく異質の埋土（砂質の強い暗赤褐色砂質土）からなり、深さ50～100cmとかなり深く掘られている。竪穴状の掘り込みについては、当初II期の住居かとも思われたが、ピット列と同方位を示し、埋土が同様であること、III期の遺物を出土することから、ピット列と同じ遺構であると認定した。



第21图 SX06 1 : 100

SB23

○規模

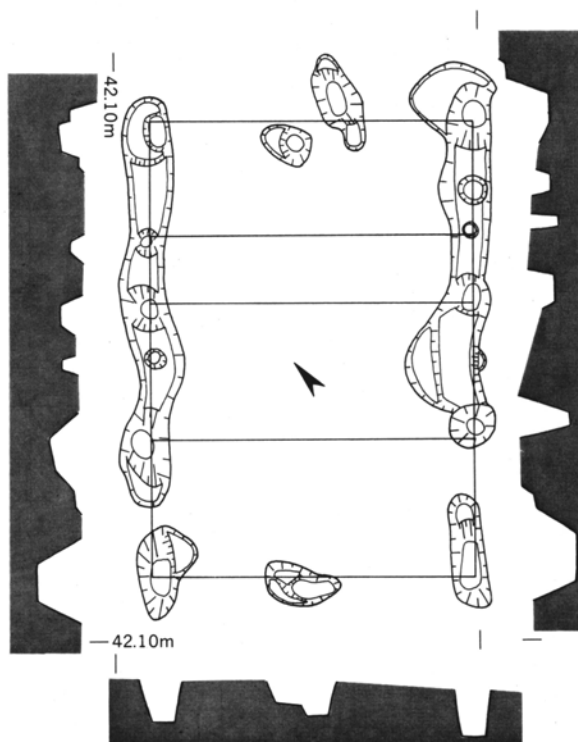
桁行(3間)・6.0m

×

梁間(2間)・4.2m

○方位

N-49°-W



第22図 SB23 1:100

SB23は3間×2間の掘立柱建物である。柱穴の埋土はSX06のビットと同じ埋土(砂質の強い暗赤褐色砂質土)で、深さも40~70cmを測る。桁行側の3基の柱穴間には溝が掘られており、その中に小ビットがいくつかみられ、板屏など施設が考えられる。梁間側の中央の柱穴は、東側では不明瞭で特定できず、西側のものは僅かに外に出る。

5. IV期の遺構

IV期に属する遺構として確認されたものはSD04のみである。

SD04は、幅50~70cm、深さ10~20cmを測り、等高線に沿うようにL字状に折れ曲がる。埋土は暗灰色砂質土で、下位にいくに従い粘質が強くなり、堆水状態があったことを窺わせる。遺物は、北西側において比較的まとまって出土している。

第Ⅳ章 遺物

1. Ⅰ期の遺物（図版1—1～11）

石堂野遺跡で出土する土師質遺物の器面は総じて非常に磨滅しており、調整の有無やその種類について識別できるものはほとんどみられなかった。

1・6・7は高坏であるが、坏部と脚上半しか残存していない。1は外・内面に縦位のヘラミガキが施され、口縁端部内面にも極僅か横位のヘラミガキが残存している。1と6・7を比較した場合、1は坏深が深く、坏の外反度が浅いのに対し、6・7は坏深が浅く、大きく外反しており、このことからみて1は欠山期～元屋敷(古)期、6・7は元屋敷(古)～(中)に属する。

4・5は広口壺の小片である。4は僅かに上方に伸びる口縁端部で、接合面より剝離している。棒状浮文は2本以上あったと思われるが、1本しか残存していない。5はクシによる横線とその間をヘラによる山形文及び斜位刻み目を施されており、体部中位にあたる。4・5とも明瞭な赤彩はみられなかったが、元屋敷(古)期に属するパレススタイル壺になるであろう。

8は碗で、SB02の周溝内より出土した。器面が磨滅しているため調整が明瞭に識別できないが、ユビによるナデのみで仕上げられているものと思われる。底部には、粘土紐を貼付した後ヨコナデで調整された高台状のものが付く。

11は異形土器で、口縁部が剝離しているが、そんなに高くはならず、ほぼ現況に近い高さで考えてよいであろう。整形は、全体にユビによる押圧でなされている。

2. Ⅱ期の遺物（図版2・3—1～37）

Ⅱ期の遺物はさらにⅡ—1、Ⅱ—2の二時期に分かれる。

Ⅱ—1期 古墳時代の伝統を引く「かえり」を有する蓋、長脚の高坏が残存し、粘土紐巻き上げによる整形が一般的に行なわれている時期にあたる。

10・15・16は小型の坏身で、坏体部形や受部形などに差異がみられるが、ほぼ同時期のものであろう。それに対して、1の高坏の坏身は大型で、古いタイプに属するかと思われるが、高坏のみに大型品が残る可能性もある。

1の坏部内面、14の底部外面にはヘラによる沈線が施されるが、1は太く、原体がヘラを想定されるのに対し、14は極く細く、クシ状の原体が考えられる。

5・7～9・18・20～22は土師質のものである。5の碗は全体にナデによる調整が施される。7は小型の甕の底部か。18は埴状の土製品である。各面は平滑で、最終調整に工具による

ケズリがなされているものと思われる。全体は火を受け、非常に脆い。20～22は土錘で、ユビによる押圧で整形される。22の口縁端には僅かに使用痕がみられる。

II－2期 ロクロ水挽き技法と成形段階からの工具の多用がみられる時期である。

28の台付碗，31の無台碗，35の台付盤は底部外面に明瞭な回転ヘラケズリが施され，この時期を特徴づけている。

23・24・32・34は口縁部でわずかに屈曲する蓋で，大・小の二種類がある。

19は，砂岩質の石を削り出し，6面体の柱状様の形態を作り出しており，火を受けた痕跡は明瞭ではないが，支脚かと思われる。

3. III期の遺物（図版4－1－5）

III期に属する遺物の出土量は極めて少ない。

1は両耳釜，2・3は内耳鍋になる。ただし3については，内面にススが付着しており耳部になる可能性もある。

4・5の天目茶碗にあたるものは，図示したもの他数点みられたが，全て同型のものである。施釉には鉄釉と灰釉がある。高台はケズリ出されている。

4. IV期の遺物（図版4－6～12）

6・7は鉄釉の擂鉢で，10本1組のクンによる沈線が内面に施される。

8は灰釉の碗で，瀬戸・美濃産と考えられる。体部外面にヘラにより蓮弁文，連続すると思われる円弧文が描かれる。

9は鉄化粧された碗で，体部外面に静上のナデ（ユビか）が施され，底部付近でわずかな突出部を作る。

10鉄釉の徳利で，11・12は鉄化粧された常滑産の大型甕である。

5. 石 器

石器類は，表土より出土したものが多く，住居内より出土したものについても床面からは遊離した埋土中からのもので，時期については不明である。

4は調整痕のある剥片で，5はフレークになる。また，その他石片・碎片かと思われる流紋岩・頁岩・安山岩・黒曜石質の小片が12点出土している。

7の砥石は上面が磨面となり，側面には削痕がある。6は砂岩質の打製石斧である。8は太型蛤刃形の磨製石斧で，側面に削痕があり，原形が遺存していない。破損した石斧を砥石等に転用したものかとも考えられる。

第Ⅴ章 ま と め

Ⅰ期以前

今回の石堂野遺跡の発掘調査で出土した石器のうち、図版5—1～5の石鏃・剝片はⅠ期以前の時期に属するものと考えられる。特に4・5の剝片については、石材にあたる流紋岩や頁岩の露頭が遺跡周辺では見られず、何らかの理由による石の「移動」が考えられる。新城市から御津町にかけての豊川右岸の河岸段丘上には、萩平A・C遺跡・加生沢遺跡・荒井遺跡・鍮水遺跡・日吉原遺跡などの旧石器時代の遺跡があり、出土した剝片の風化度合などは鍮水遺跡・萩平遺跡¹¹のものと極めてよく似ている。これらのことから、4・5の剝片は自然作用によって偶発的にできたものではなく、旧石器時代に属する可能性があるものと考えられる。遺物が上位の地点より流れ込んだものか、石堂野遺跡の地山面下にあるものかということについては、地山面を掘り下げる確認が必要であったが、時間的な制約もあり、実施することができなかった。今後近接した地域の調査がなされる場合においては、遺跡の有無の確認が必要となるであろう。

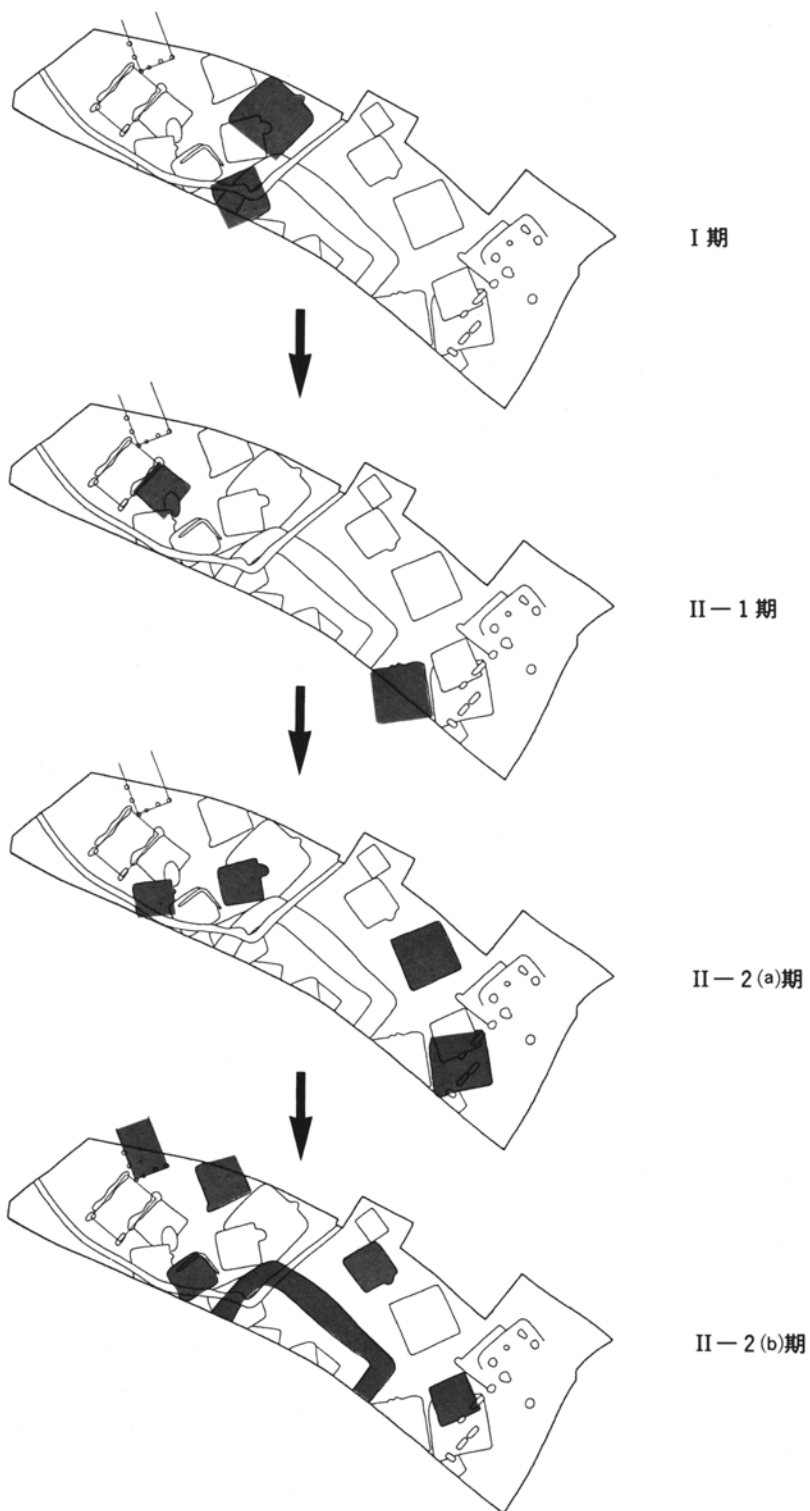
Ⅰ期

SB02は、土師質土器しか出土しなかったこと、周溝内より碗(図版1—8)が転落した状態で出土していること、Ⅱ期の住居に比して大型であることからⅠ期に属するものとした。しかしそこで問題となるのが、焼土面をもつ突出部であるが、これはSB02の周溝が、SB14のようにカマドの部分で切れず、繋がっていくことからみて、住居とは別遺構か、カマドとは別機能の施設と考えた方がよいであろう。これに対しSB18は、遺物量は極めて少なく、床面上で出土した高杯(図版1—1)のみで時期を決定した。住居が近接しているため同時に2軒建っていたとは考えにくく、遺物からみると、SB18→SB02が考えられる。

Ⅰ期は、欠山期～元屋敷(古)¹²期にあたるが、この時期は低地部に立地する弥生中期的な大集落が解体し、中・小集落が分散してムラを営む傾向がみられる。豊川・御津地域においても、堂前遺跡や船原遺跡にみられるように寄道期までは低地部に立地しているが、欠山期になると三河国分寺下層・国府高等学校遺跡・坊入遺跡のように中位段丘上にも遺跡が展開するようになる。石堂野Ⅰ期の遺構も、このような弥生社会の流れの上で理解されていかなければならないであろう。

Ⅱ期

考古学的方法によって建物の同時性を考える場合、堅穴住居や掘立柱建物に良好な



第23図 石堂野遺跡遺構変遷想定図

状態で共伴する遺物が少ないとか住居の方向性にどのような意味があるのか等の理由により、明確にできない場合が多い。

石堂野Ⅱ期に属すると考えた竪穴住居・掘立柱の変遷を考える場合も、住居に確実に伴って出土する例がほとんどなく遺物だけで時代性を導き出すことは難しい状況で、また土器の一型式内に納まる住居が軒を接するという事態も生じた。そのため、住居の変遷を検討する方法としては、①住居の切合関係、②床面付近より出土した遺物、③軒等の建物付属施設を考えた場合に成立しないもの、④住居の方向性を考慮し、①＞④の比重で想定した。変遷を概観したものを第23図に示したが、これをみると方形溝付近を中心とした建物の孤状の配列、ある程度の方向性(第2表)の2点が住居の位置決定の要素として浮かびあがってくる。このような竪穴住居中心・孤状配列(中央に広場を持つ)という様相は、東日本一帯の丘陵地に展開する古代の集落と同じ傾向を示し、掘立柱建物中心・方向規制という傾向を示す西日本のものとは明らかに違っている⁸³。

Ⅱ期に実年代をあてはめるなら、Ⅱ－1期－7世紀中葉～後葉、Ⅱ－2期－8世紀中葉～後葉⁸⁴となる。ここで問題となるのが、古代の集落における「計画村落」と「自然村落」の規定の問題である。「計画村落」とは「当該村落の外にある力ー公権力ーによって計画された村の意味⁸⁵」といった規定がなされており、この場合都城・国・郡衙・駅・条里に伴う集落が考えられる。またこれとは別に高橋一夫氏⁸⁶により、関東地方において8世紀に突如として出現する竪穴住居を中心とした大集落をも「計画集落」と考えるという意見もある。一方「自然村落」については明確な規定はなく、台地・丘陵尾根などで単独で見つかる住居について、季節的な作業小屋や特殊工人の居住が考えられている⁸⁷のみである。石堂野Ⅱ期については、大規模な「計画村落」とは考えられず、それは低位の三河国府を中心とした条里地割地域⁸⁸を指すものであろう。また「作業小屋」的な特殊な意味合いをもたすことも無理があるかと考えられる。Ⅱ期は発掘区内においては7世紀中葉に突然現われるかのようにみえるが、6世紀末～7世紀初に比定される高坂遺跡とは時間的に連続する可能性あり、谷を挟んだ集落の移動が考えられる。7～8世紀には、低地部においては条里制を中心として開発が進められていく一方で、丘陵部においては谷水田などの開墾が進められ

I		Ⅱ－1		Ⅱ－2(a)		Ⅱ－2(b)		X	
S B 18	22	S B 14	10	S B 06	9.5	S B 15	26.5	S B 22	21
S B 02	46	S B 05	45	S B 03	10	S B 01	28	S X 01	38
				S B 16	14	S B 07	30	S B 21	46.5
				S B 10	24.5	S B 09	36		
						S D 06	50		

第2表 各時期の住居方位

ていたとすると、石堂野Ⅱ期は耕作地の変化とともに出現してくるものと考えられ、それが「公権力」とどのような関係であったかは不明であるが、大規模な開発でないという点を重視すると、律令国家内での一般的な集落≒自然村落⁸⁹と考えられる。

Ⅲ期

Ⅲ期は、15世紀後半～16世紀前半にあたる⁸¹⁰。SB23 は桁行側に溝をもつことから、桁行側は板屏、梁間側は草葺壁であったかと思われる⁸¹¹。SB23 と同方向を向く SX06 は、柵の可能性が高いが、第24図のように想定すると、地山を削平して平坦地を作り、そこに建てられた3間×2間の建物と付属施設とも考えられ、崖沿ということや眺望が良好ということを考えて、望楼のようなものが推定され、三河と遠江の争乱に関係したものかと考えられる。

Ⅳ期

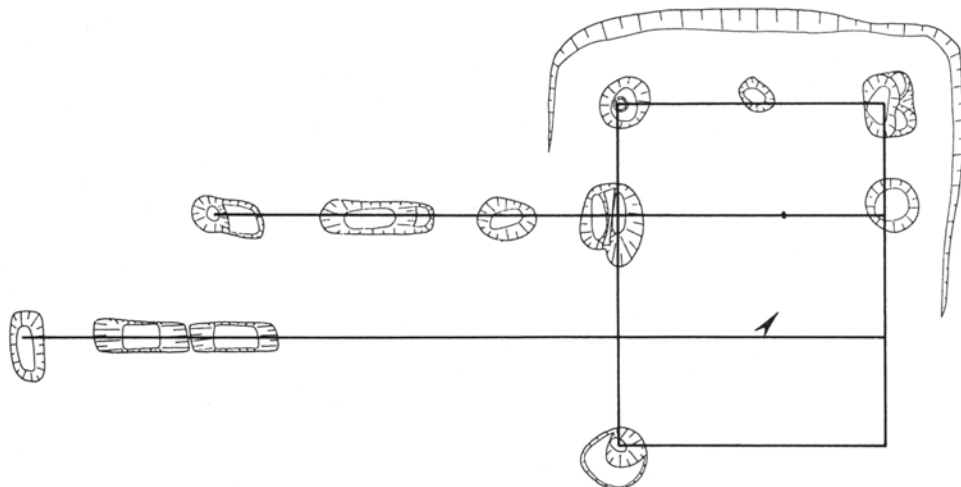
Ⅳ期は17世紀代⁸¹²に属する。

SD04 の性格については、明らかではない。

注

1. 川合剛・安達厚三「愛知の旧石器資料(4)―宝飯郡一宮町鍾水遺跡採集の石器―」『名古屋市博物館研究紀要』第9巻 1985
澄田正一・安達厚三他「萩平(c)遺跡」『豊川用水路関係遺跡調査報告』1965
安達厚三「萩平A地点第二次調査報告」1969
2. 加納俊介「東海地方」『シンポジウム“月影式”土器について 報告編』1986
3. 高橋一夫「計画村落について」『古代を考える』20号 1979
甲元眞之「農耕集落」『日本考古学』4 1986
4. 楢崎彰一「猿投窯の編年について」『愛知県古窯跡群分布調査報告(Ⅲ)』1983
5. 直木孝次郎「古代国家と村落―計画村落の視点から―」『ヒストリア』42 1978
6. 高橋一夫「計画村落について」(前掲)

7. 中山吉秀「離れ国家考」『古代』61号 1978
8. 歌川學「三河国の条里制」『三河遠江の史的研究』1984
9. この時期に律令制を完全に離れた集落が多く存在したとは考えられず、何らかの形で公権力の下に組み入れられていたものと思われる。石堂野遺跡の成立も、公権力の計画によって行なわれた可能性もあり、この場合自然村落と呼称するのかどうかは問題がある。
10. 藤澤良祐「瀬戸大窯発掘調査報告」『瀬戸市歴史民俗資料館 研究紀要Ⅴ』1986
11. 古代の「溝もち」住居に関しては中田英「古代東国集落における掘立柱建物の一考察―「溝もち」掘立柱建物遺構の壁構造の復元について―」『神奈川考古』第12号 1981がある。
12. 宮石宗弘・藤澤良祐・中野泰裕・赤羽一郎各氏の御教示による。



第24図 SX06 復元推定図

第Ⅵ章 高 坂 遺 跡

石堂野遺跡の調査時に、同じ原因者による、ほぼ同時期の遺跡である高坂遺跡の立合調査があり、多くの遺物が出土している。石堂野遺跡を考える上でも貴重な資料であると思われるのでここに付載として紹介してみたい。

位置 石堂野遺跡の北西約500mの愛知県宝飯郡御津町広石字新宮山に所在する。

立地 北から南にのびる舌状の丘陵の平坦地端部

遺跡概要 高坂遺跡は、石堂野遺跡の比高10～15mの谷を挟んだ対岸にあたる位置にあり、県遺跡台帳には記載されていないが、近年小量の遺物が採集されていた。昭和60年7月に、県立高校新設のための工事用道路建設に伴い、遺跡南側の旧道を拡張することとなり、県教委文化財課中川真文の立合調査が行われた。

範囲は1m×5m程度で、表土(30～40cm)を除去すると、灰黒色砂質土(30～40cm)があり、その下が赤褐色砂質土面となり、これが地山と思われる。明瞭な遺跡は検出されなかったが、地山に段をなす落ちこみ部があり、焼土及び焼土面がみられたことなどから、竪穴住居である可能性が高く、北側に広がっていく平坦地があるという立地条件は石堂野遺跡とも酷似しており、集落の存在が想定される。

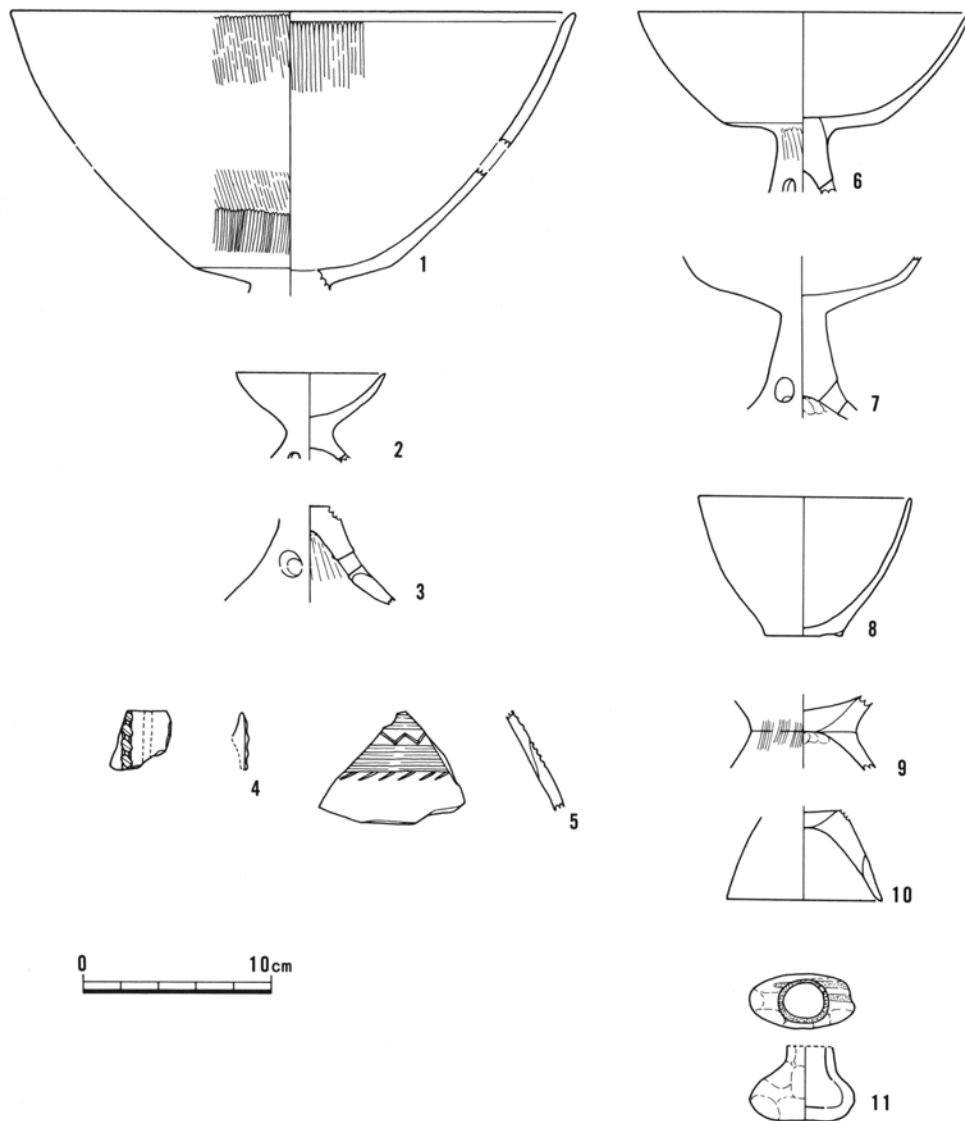
遺物は狭い範囲ながらも、コンテナ2箱分(数百点)が出土し、そのほとんどが土師器甕・甔の破片であり、須恵器は破片をいれても数十点と点数が少なかった。土師器甕・甔は小単位の破片が多く、復元・図化できるものはわずかしかなかった。ただ、図版6-2・3の甕のみ完形の状態で出土している。口縁部の点数が少ないため個体数は不明である。甔は把手部のみが残存状態がよく、それで見ると3～4個体あるものと推定される。また、土製支脚(図版6-4)も出土しており、このことから住居である可能性が窺われる。

高坂遺跡の時期であるが、石堂野遺跡のⅡ-1期よりもやや古い時期、6世紀末～7世紀初が考えられ、時期的・位置的にみても石堂野遺跡との関連が注目される。



第25図 石堂野遺跡全体図

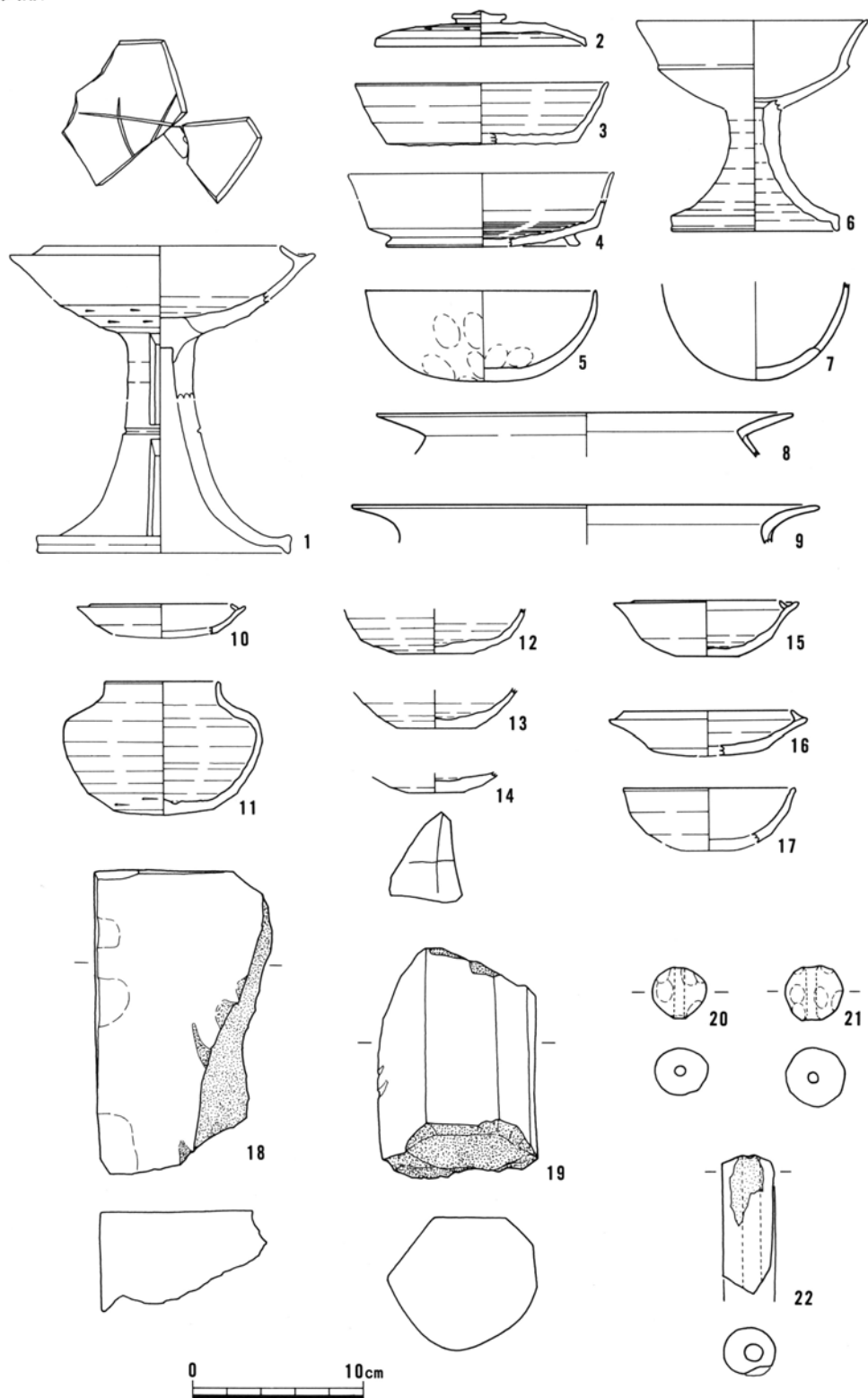
図版 1



石堂野遺跡出土遺物（Ⅰ期）

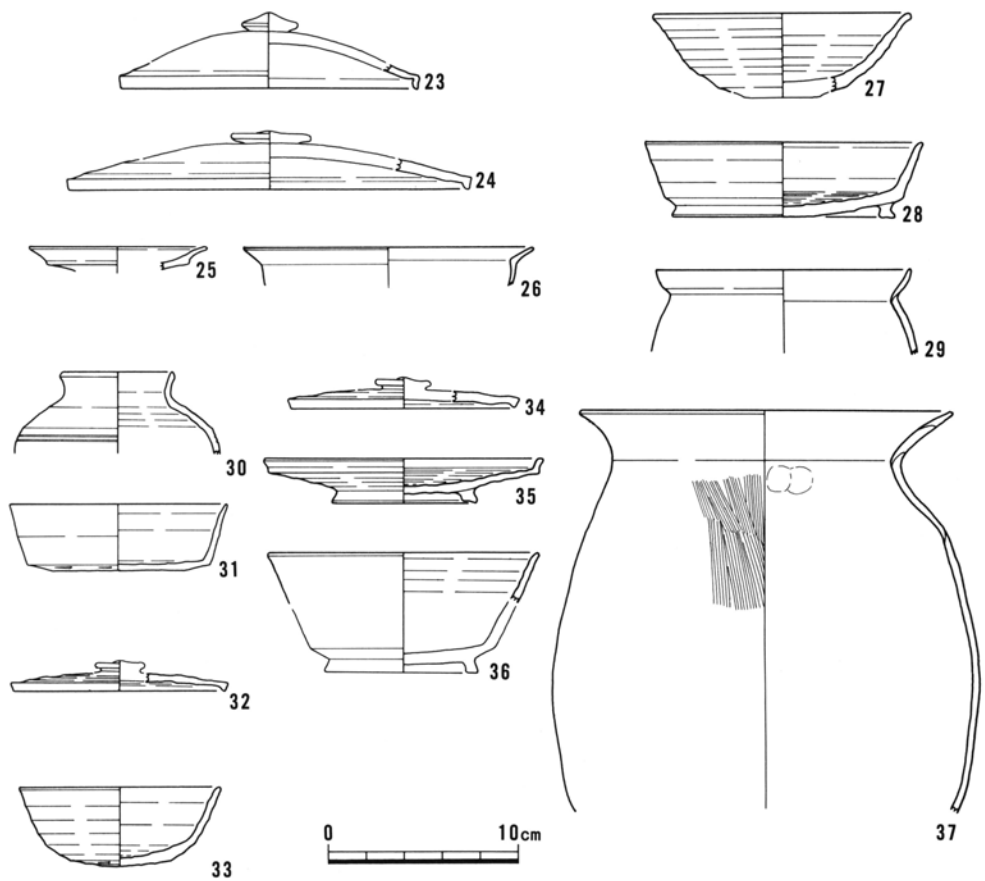
番号	出土地点	諸 特 徴	残存状況
1	S B18	口径30.5cm, 坏底径10.2cm。全体にヘラミガキ。口縁端部内面は横向のヘラミガキ	坏部 $\frac{1}{2}$
2	S B05	口径7.8cm。磨滅のため調整は不明。透し穴 3 方向。	坏部完部
3	S D06上層	頸径3.2cm。磨滅のため調整は不明。透し穴3方向。	脚上部 $\frac{1}{2}$
4	S D06上層	棒状浮文 2ヶ所。ヘラ状工具による刻み 3ヶ所。磨滅のための調整不明。	口縁端部少片
5	S B02	4本クシによる横線後ヘラに沈線。原体左回り。塗彩は不明。	小片
6	S B07	口径17.2cm, 坏底径8.1cm。坏高6.0cm。全体にヘラミガキ。透し穴 3 方向	坏部 $\frac{2}{3}$
7	S B05	坏底径11.0cm。磨滅のため調整は不明。透し穴 3 方向。	坏下部, 脚上部
8	S B02周溝	口径11.1cm。底径4.0cm。底部粘土紐貼付後ユビナデ。	全体 $\frac{2}{3}$
9	S D06上層	外面屈曲部にわずかにハケ残る。内面はナデ。	屈曲部分
10	S D06上層	底径8.2cm。内外面ナデか。	脚部坏
11	表 土	長径5.5cm。短径2.8cm, 器高(4.0)cm。全体に指圧痕	ほぼ完形

図版 2



石堂野遺跡出土遺物（II期）

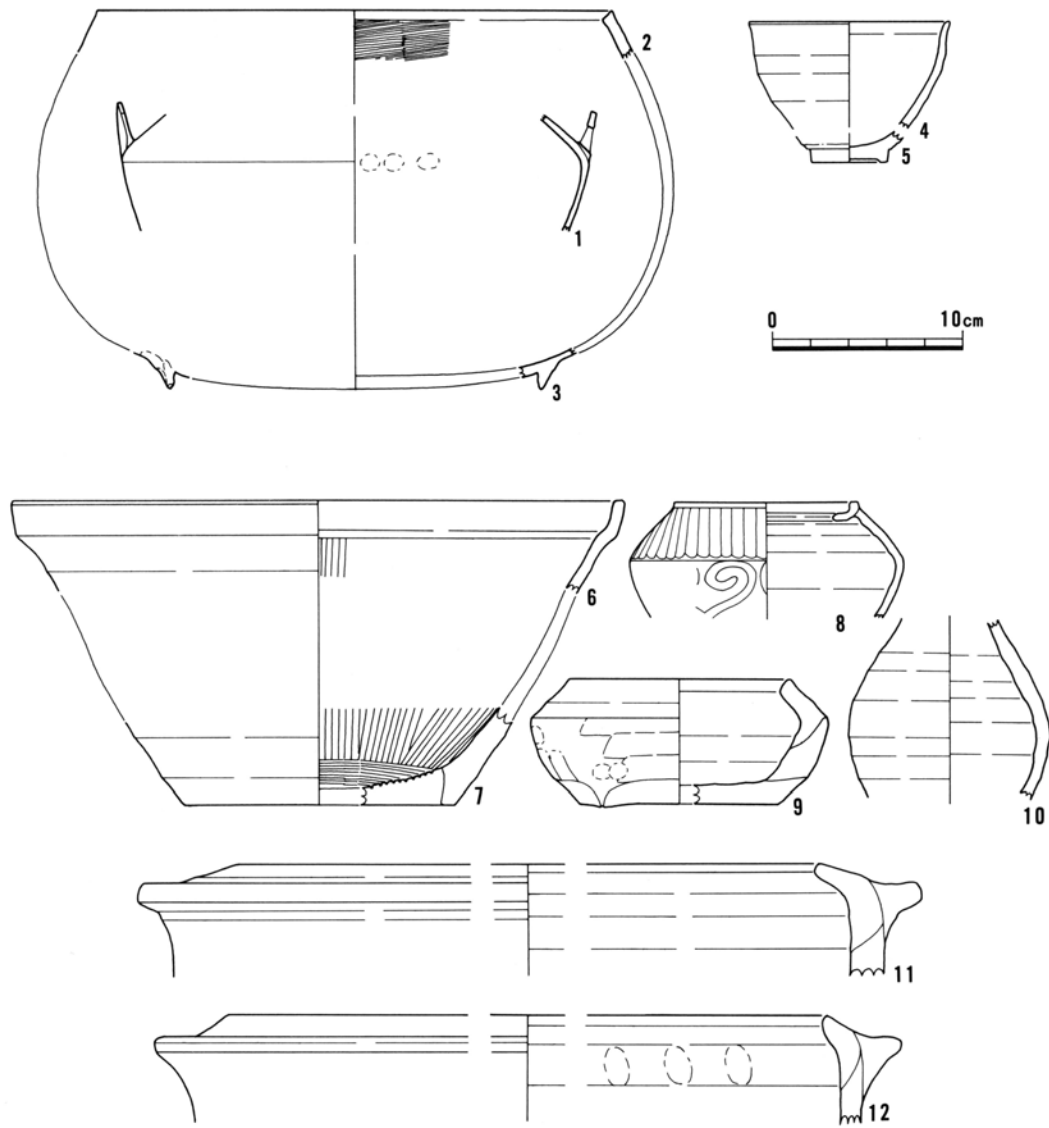
図版 3



石堂野遺跡出土遺物（II期）

番号	出土地点	法 量(cm)			調 整	残存状況	番号	出土地点	法 量(cm)			調 整	残存状況
		口径	底径	器高					口径	底径	器高		
1	S K124	—	—	—	外面ヘラケズリ	杯下半, 脚上半	20	表土	長さ3.0cm, 幅3.1cm, 孔径0.6cm. 全体に指圧痕	—	—	—	完 形
2	S K124	12.5	—	2.1	外面 $\frac{1}{2}$ ヘラケズリ	$\frac{1}{2}$	21	S X05	長さ3.0cm, 幅3.3cm, 孔径0.6cm. 全体に指圧痕	—	—	—	完 形
3	S K124	14.8	11.2	3.0	外面 $\frac{1}{2}$ ヘラケズリ	$\frac{1}{2}$	22	S X05	幅3.0cm, 孔径1.0cm. 全体に指圧痕	—	—	—	
4	S K124	—	11.2	—	回転ナデ	$\frac{1}{4}$	23	S B03	15.4	—	—	回転ナデ	$\frac{1}{2}$ 以下
5	S K124	13.6	—	5.3	指によるナデ	ほぼ完形	24	S B03	20.7	—	—	回転ナデ, 灰かぶり	$\frac{1}{2}$
6	S K124	—	9.6	—	回転ナデ	$\frac{3}{4}$	25	S B03	9.2	—	—	回転ナデ, 内面灰かぶり	$\frac{1}{8}$
7	S K124	—	—	—	磨滅のため不明	底部のみ	26	S B03	15.2	—	—	磨滅のため不明	$\frac{1}{6}$
8	S K124	24.4	—	—	ヨコナデ	$\frac{1}{8}$	27	S B06	13.4	—	—	回転ナデ, 全体に灰かぶり	$\frac{1}{6}$
9	S K124	27.2	—	—	ヨコナデ	$\frac{1}{2}$	28	S B06	14.6	10.7	3.9	底外面ヘラケズリ	$\frac{1}{2}$
10	S B14	8.2	—	—	回転ナデ	$\frac{1}{3}$	29	S B06	13.3	—	—	磨滅のため不明	$\frac{1}{6}$
11	S B14	6.7	5.5	7.8	外面 $\frac{1}{2}$ ヘラケズリ	完 形	30	S D06	5.6	—	—	回転ナデ	$\frac{1}{10}$
12	S B14	—	4.5	—	回転ナデ	底部のみ	31	S D06	10.4	6.8	3.5	底外面ヘラケズリ	$\frac{1}{2}$
13	S B14	—	4.5	—	回転ナデ	底部のみ	32	S B10	10.1	—	—	回転ナデ	$\frac{1}{2}$ 以下
14	S B14	—	3.2	—	回転ナデ, ヘラ沈線	底部のみ	33	S B16	10.6	4.6	4.2	外面 $\frac{1}{2}$ ヘラケズリ	$\frac{1}{2}$
15	S X04	8.1	3.6	3.3	底部静止ナデ	$\frac{1}{4}$	34	S B07	10.7	—	—	回転ナデ, 灰かぶり	$\frac{1}{2}$ 以下
16	S B05	9.7	—	2.6	回転ナデ	$\frac{1}{6}$	35	S B07	14.5	7.5	2.8	底外面ヘラケズリ	$\frac{2}{3}$
17	S B05	10.0	—	—	回転ナデ	$\frac{1}{8}$	36	S B07	14.2	—	—	回転ナデ	$\frac{1}{10}$
18	S K124	土師質, 厚さ5.8cm程度か。					37	S B07	口径19.5cm. 磨滅のため調整不明。				$\frac{1}{6}$
19	S B06	砂岩。幅9.0cm, 厚さ7.8cm											

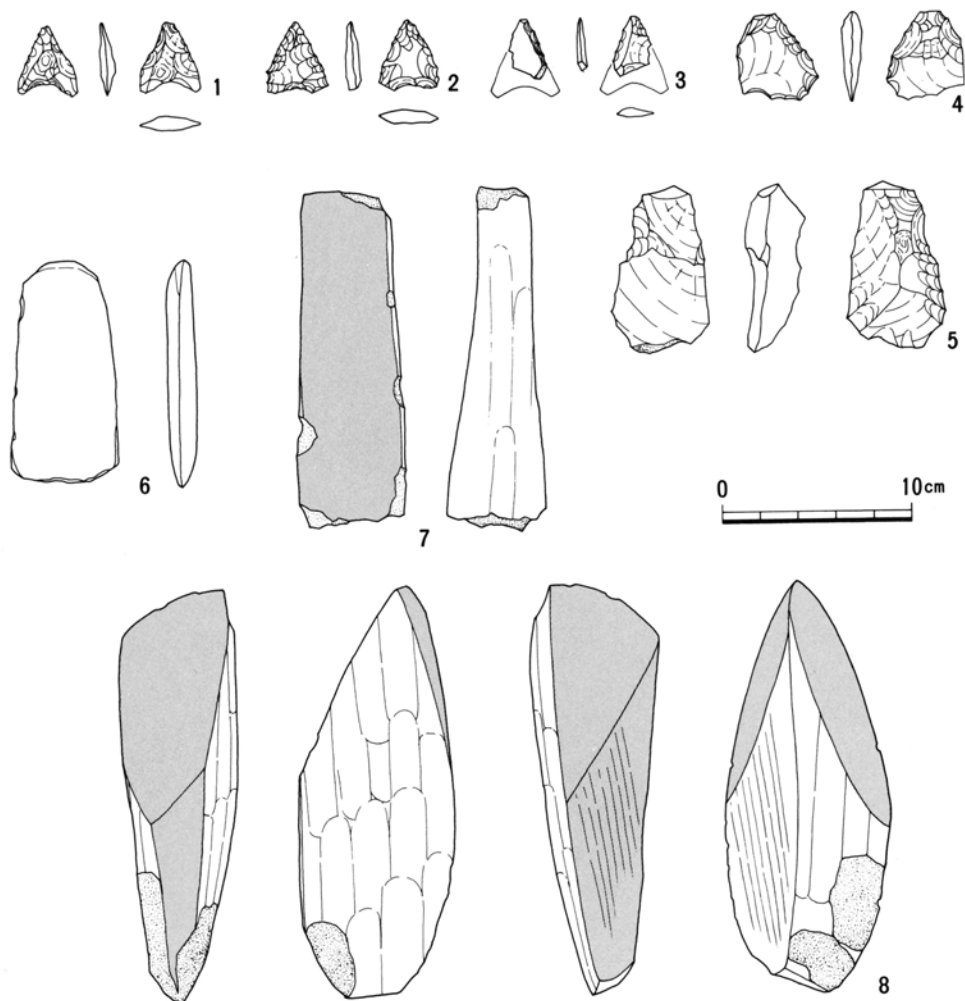
図版 4



石堂野遺跡出土遺物（Ⅲ期・Ⅳ期）

番号	出土地点	法 量 (cm)			調 整	残存状況	番号	出土地点	法 量 (cm)			調 整	残存状況
		口径	底径	器高					口径	底径	器高		
1	S D04	—	—	—	全体にスス付着、 内面指圧痕	1/8	6	S D04	31.8	—	—	回転ナデ、クシ沈 線、鉄釉	1/4
2	S B07	26.8	—	—	外面スス付着、 内面ハケ後ナデ	1/2	7	S D04	—	14.1	—	回転ナデ、クシ(10本)沈 線、底部回転糸切り、鉄釉	1/8
3	S B07	—	—	—	ヘラによるナデ、 内面スス付着	小片	8	S D04	9.6	—	—	回転ナデ、ヘラに よる施文、灰釉	1/6
4	S K28	10.5	—	—	回転ナデ、鉄釉	1/2	9	S D04	10.5	10.4	6.5	回転ナデ、全体に薄 い鉄釉、手持ちナデ	1/3
5	S D04	—	4.1	—	回転ヘラ削り灰釉	脚部のみ	10	S D04	—	—	—	回転ナデ、 外面鉄釉	1/4
							11	S D04	—	—	—	回転ナデ、 薄い鉄釉	—
							12	S D04	—	—	—	回転ナデ、 薄い鉄釉	—

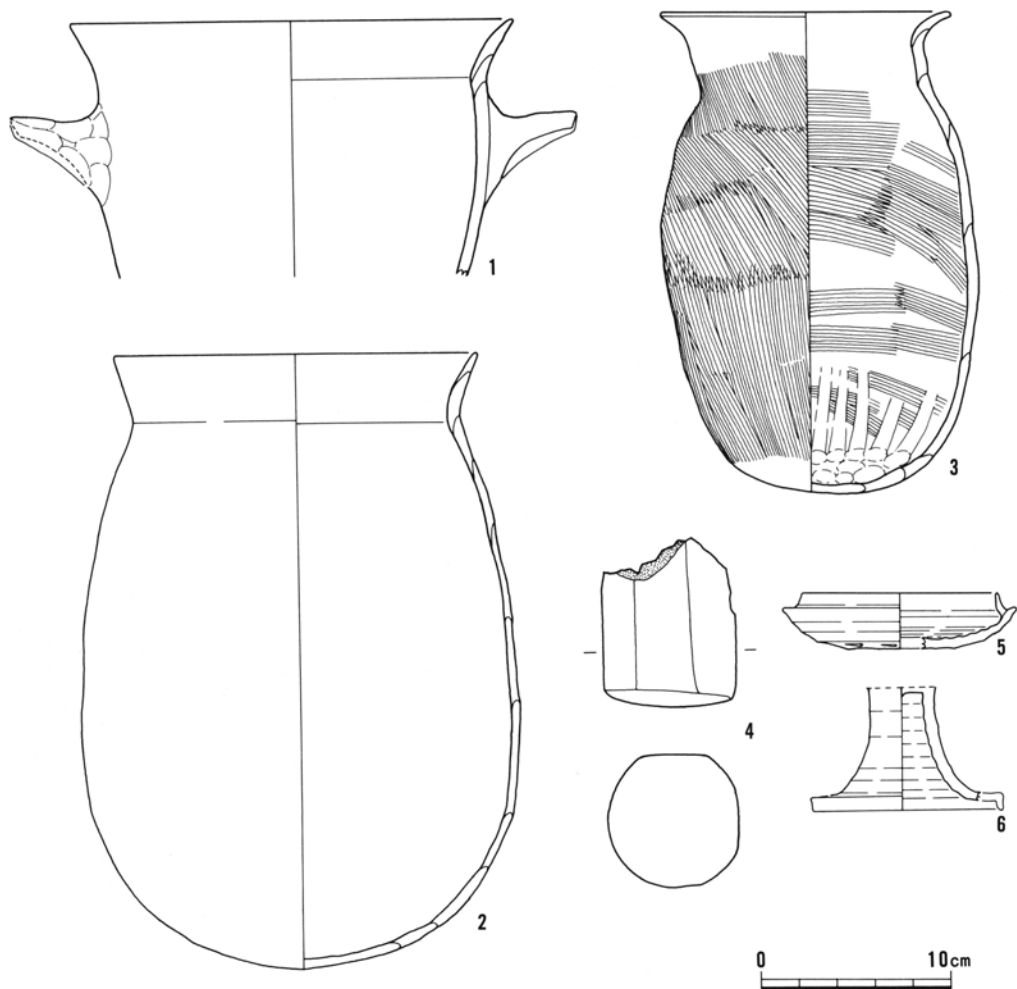
図版 5



石堂野遺跡出土石器

番 号	出土地点	法 量(mm, g)				石質・諸特徴	残存状況
		長さ	幅	厚さ	重量		
1	表 土	19	15	4	0.7	安山岩	完 形
2	S D06	18	16	4	1.0	頁岩又流紋岩	基部わずかに欠損
3	S B05	(16)	(8)	(2.5)	0.3	安山岩	基部欠損
4	表 土	23	20.5	5.5	1.9	頁岩又流紋岩。調整痕有。	完 形
5	表 土	44.5	25	15.5	11.4	流紋岩。	完 形
6	S B05	58	28	8	22.3	砂岩。	完 形
7	表 土	88	29	25.5	92	凝灰岩。磨面，削痕面有。	わずかに欠損
8	表 土	108	33	41	147.7	凝灰岩。磨面，削痕面有。	

図版 6



高坂遺跡出土遺物

番 号	諸 特 徴	残存状況
1	口径23.1cm。口縁外内面ヨコナデ。体面外面ハケ、内面は不明。把手部指圧痕。	体部上半 $\frac{1}{2}$
2	口径19.1cm, 最大径23.2cm, 器高32.0cm。口縁外内面ヨコナデ。他の調整は不明。	全体 $\frac{1}{2}$
3	口径15.1cm, 最大径16.4cm, 器高25.0cm。口縁外内面ヨコナデ。体部外面ハケ、内面ハケ後底部ユビナデ。	完 形
4	土師質支脚。幅6.8R。側面4～6面の面取。	下半のみ
5	口径10.2cm, 最大径12.2cm, 器高2.9cm。坏部 $\frac{1}{2}$ 回転ヘラケズリ。	$\frac{1}{3}$
6	頸径3.5cm。調整は全体に回転ナデ。	脚部上部のみ

図版 7



調査前



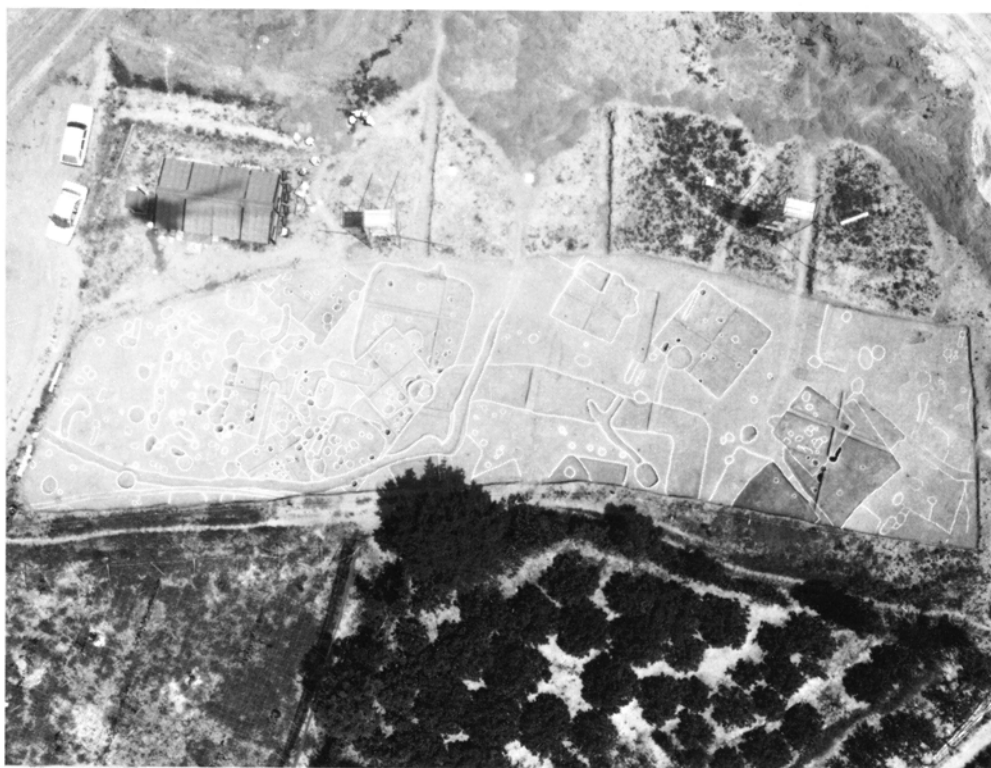
調査区遠景

(東より)



調査風景

図版 8

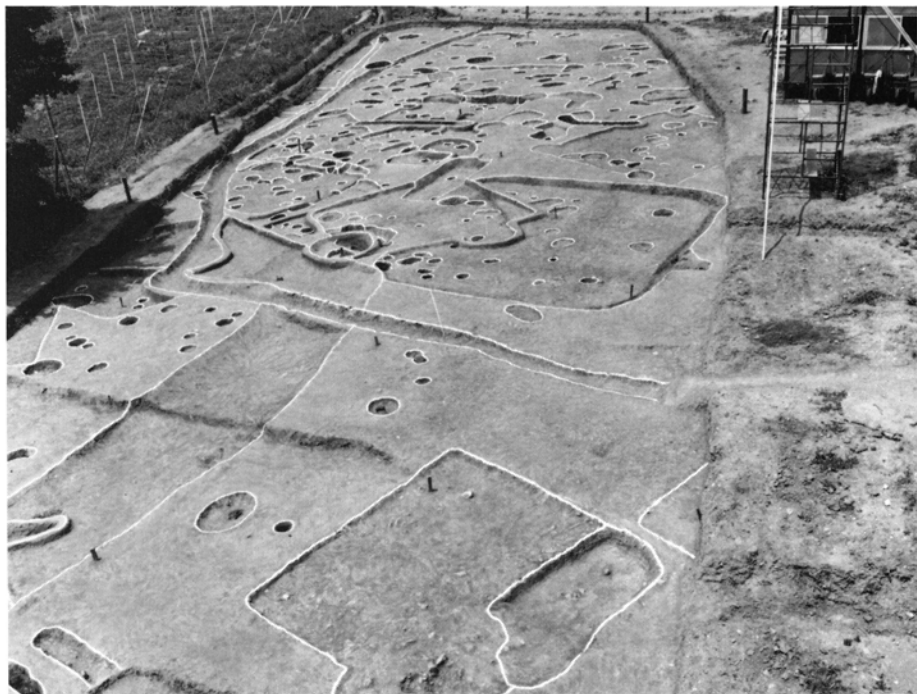


石堂野遺跡全景

図版 9



発掘区西側



上 発掘区中央部
下 S B02

図版11

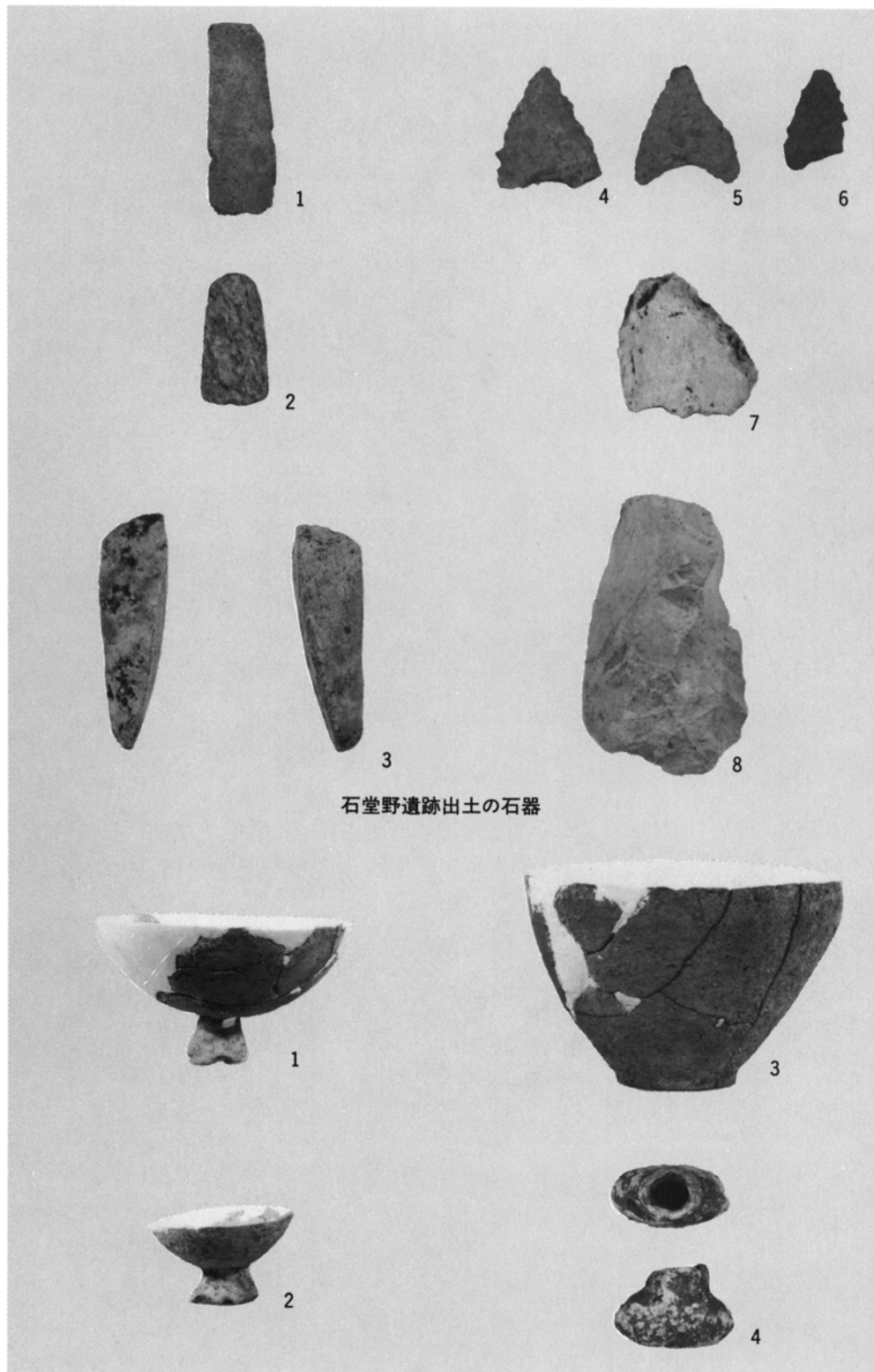


上 SB15・16セクション
下 発掘区東側



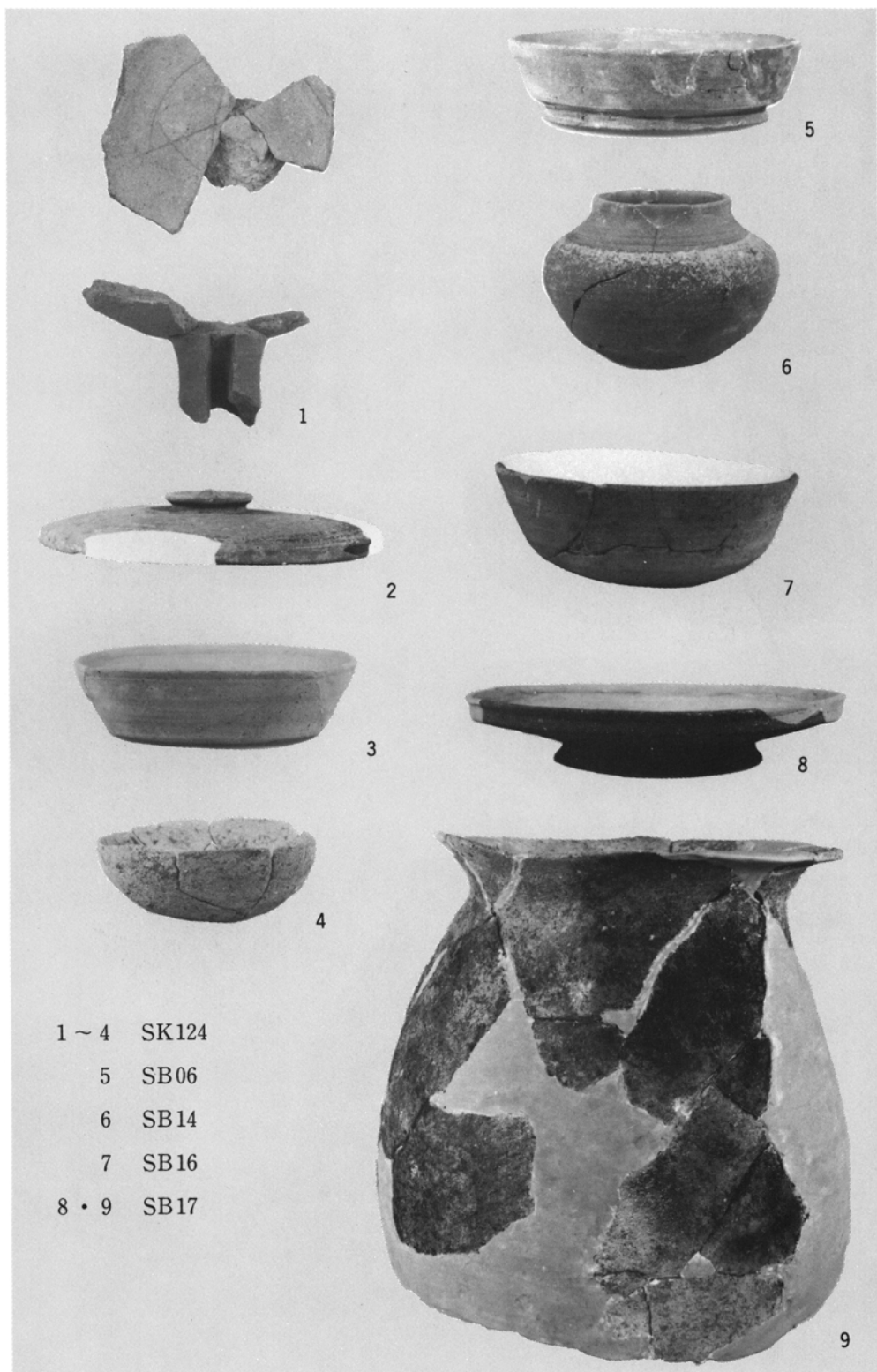
上 S B02周溝内土器出土狀態

下 S K124土器出土狀態

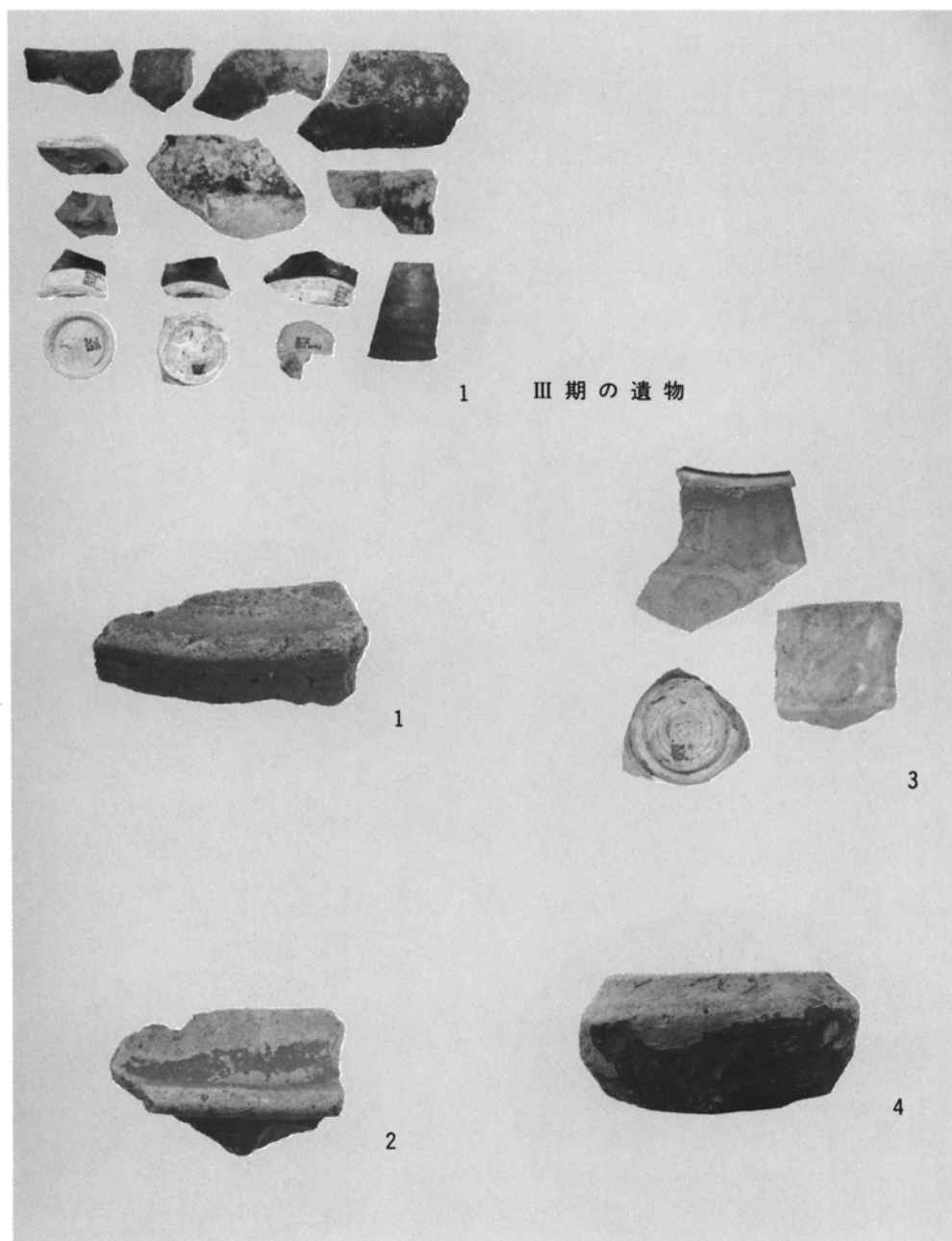


石堂野遺跡出土の石器

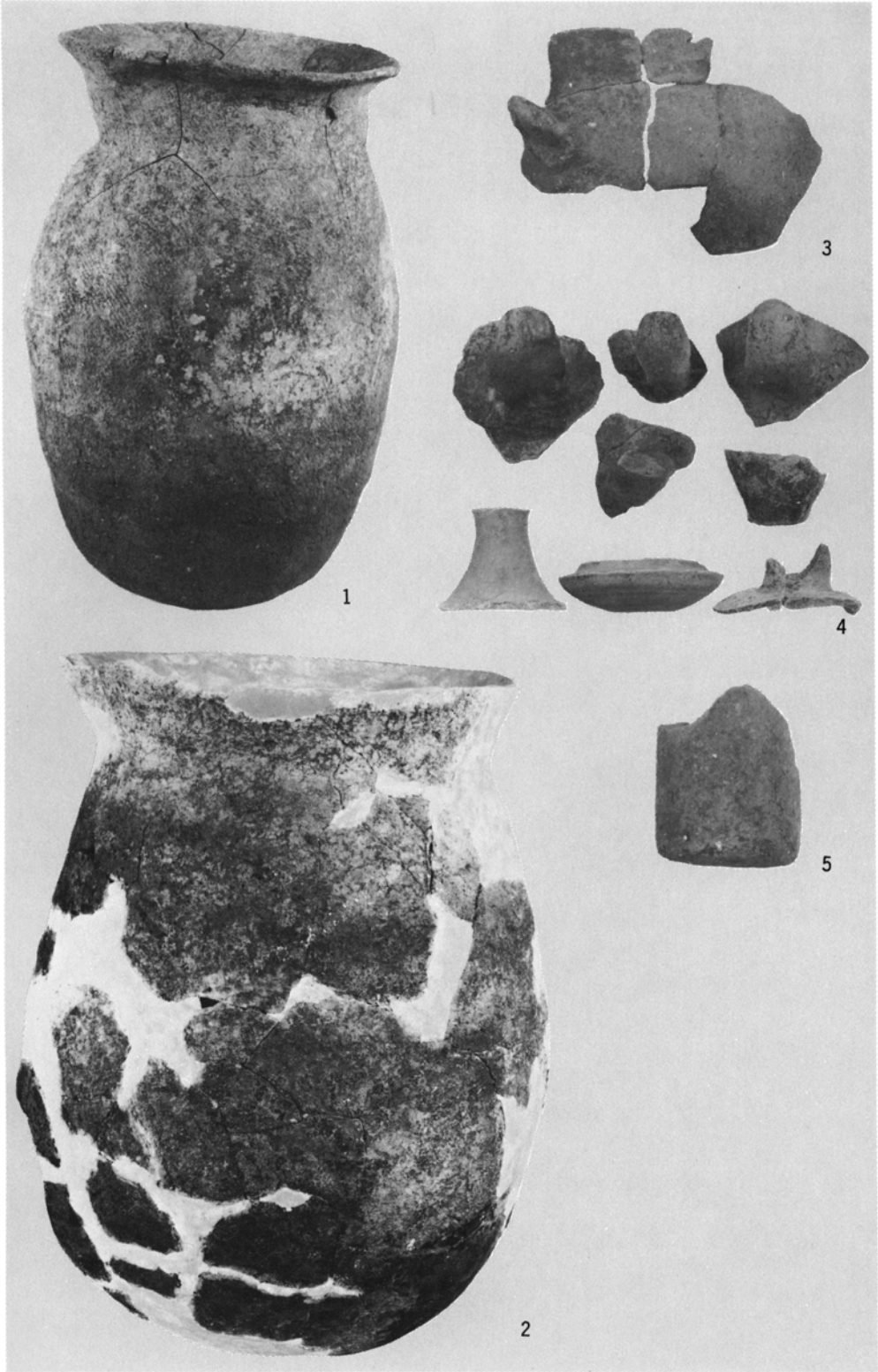
I 期 の 遺 跡



II 期の遺物



IV 期の遺跡 1～4 S D04



高坂遺跡出土遺物

石 堂 野 遺 跡

—(財)愛知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第1集—

1987年3月31日発行

編 集
発 行

財団法人 愛知県埋蔵文化財センター

印 刷

西濃印刷株式会社